

---

# 真剣で臆病者に恋しなさい

bau

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣で臆病者に恋しなさい

### 【Nコード】

N3933S

### 【作者名】

b a u

### 【あらすじ】

風間ファミリーの中で唯一の常識人、師岡卓也  
彼はある少女のために自分を変えようとする。

初めて小説を書きました。きっかけはこの素晴らしいマジ恋ss  
作家さんたちに憧れて書いてみました。

駄文すぎてちゃんと文章になっているか疑問です。ちなみに主人公はモロです。かなりモロを魔改造します！！「こんな奴モロじゃねえ！マジ恋はこんな作品じゃない！」と思いの方そのまま戻るのが

タンを押すことをお勧めします。それでもかまわないという人はそのままお進みください。更新は不定期です。  
ご感想等、お待ちしております

## プロローグ 1話(前書き)

駄文ですけどよろしくお願ひします。

## プロローグ 1話

師岡卓也は風間ファミリーの中では常識人である。

誰がどう見ても十人中十人はそう答えるだろう。

それもそうだ。あまりにも異常すぎるメンバーが揃ってるからである

パワーと異常な筋肉がある風間ファミリーの筋肉担当、島津岳人

いつも元気、努力に関しては誰よりもずば抜けている努力の天才、  
川神一子

風間ファミリーの参謀的存在、名軍師、直江大和

自称、大和の妻であり弓兵の申し子、椎名京

完全無欠地上最強、川神百代

絶対的なカリスマ性を持つ我らのリーダー、キャップこと風間翔一

そして、風間メンバーの常識人、師岡卓也……

正直、卓也はそんなポジションが嫌だった。

幼少の頃、いつも自分は斥候の役で敵をおびき寄せたりそういう役割しか与えられなかった

自分には大和みたいな作戦を考えたり、キャップのようなリーダーシップを取れる才能もない

ひたすらに囿役、仮面ライダーでいえば主人公の友達役……

そんな生きどつりを感じながら風間ファミリーとやるせない日々を過ごしていた。

しかし、そんな彼にも恋というものが生まれた……

その人の名は椎名京……

彼女の存在が卓也にとって大きな人生を変えることなる

昔、椎名京は周りから嫌われていた。母親がとつかえひつかえに男と遊んでいることでその子供にあたる京も「椎名菌」としてバイ菌扱いされていたのである

「うわ、椎名だ、クセー！」

「こいつの母親、インバイってやつみたいだ！」

「いやーい！いやーい！椎名菌がここにいるぞ！きたねえからどっかいけよ！」

「お前なんでここにいるんだよ！椎名菌であるお前のクラスはここじゃねえ」

「……じゅうう」

『いーんばい！いーんばい！いーんばい！』

京に対して罵倒し続けるクラスメイトたち、その中で卓也は彼女を

助けたいと思っていた。

しかし、ただ思っているだけで行動には移せなかった。

もし、行動に移せば次は自分が狙われる、力も策も何も持っていないのに卓也にとつて

無謀であつた。

ただ、誰かに助けを呼ぶしかない。

そんな選択しかない自分…

好きな子一人守れない自分…

悔しくて、悔しくて、たまらなかった。

「ガクト…大和…あの子助けてあげようよ。」

勇気を出して仲間である。ガクトや大和に助けを呼ぶ  
だがガクトたちの答えは非情な言葉として卓也の元に帰ってくる

「やだね、なんで俺様が椎名菌を助けなきゃいけない会話したら移るじゃないか」

「……イジメなんて……くだらぬ、ああいつのは関わらない方がいい  
(ニヒルなものに毒されてる)」

このままじゃ彼女を助けてあげられない卓也はいじめられている京を眺めることしかできなかった。

その日の下校時刻、大和やガクトの遊びを断り卓也は一人で多馬川の土手沿いで考える、どうしたら彼女を救えるのだろう。どう考えてもいい案は見つからない、このままいけば確実に彼女の心が壊れてしまう

「少年！！そこで何をしている」  
卓也はふと顔をあげるとそこにはとてつもない美人が立っていた。

柔沢紅香

彼女はそう名乗った。

柔沢紅香

彼女はそう名乗った。

彼女の話はとても興味深い話であった。

国々の戦場の話や有名人の護衛の話

とても現実離れた話に卓也は疑問を抱いた。

なんだろう！？この人一体何者なんだろう？

当然といえば当然だろういきなり自分の近くにきて突拍子のない話をしてるのだふつうの人間なら完全にドン引きである。

「いきなりこんな話をしてすまない面白くなかったな」

「いえいえ、とても興味深い話でした。」

「君がこんな多馬川の土手でよくよしてるのを見てしまったのでなこんな他愛のない話をして励ましてやりたかったんだよ」

ふっと卓也は思った。この人ならあの子を助けられるかもしれない勇気を出して言ってみる

「あの紅香さん！！初対面でこんな言うのも失礼なんですけど助けてたい人がいるんです！！」

卓也は思いつ。

この言葉が自分を変える始まりだったのかもしれない……





## 第2話 過去（前書き）

更新遅くてすみません。あとキャラ崩壊が始まっています。

文章下手すぎてうまく書けない！！

またまた駄文です・・・すみません

最後まで読んでくれる幸いです！！

## 第2話 過去

紅香さんに今日のできごとを話した。

ある少女がいじめられていること、自分では力がなくて助けられないこと、自分の仲間たちに呼びかけたが断られたこと

紅香さんは、こんな幼い僕の話当真剣に聞いてくれました。

「君が強くなっていじめた奴を倒してたらいいじゃないか」

紅香さんの発言に僕はこう思う「そんなの絶対に無理だって」だってそうだろうか？

生まれてこの10年間体を鍛えたこともないし、風間ファミリーの中では斥候役で守られてばかりだこんな僕が強くなる！？冗談じゃないか？って思ってしまう。紅香さんは続けて言うてくれました。

「もし本当に強くなりたいと思うのなら、明日もう一度この場所に来るといい、私の知り合いでとてもいい拳法家がいるから紹介してあげよう。ただし君も生半可な答えを出すのはやめてくれそんな弱い意志ならはつきり言って君はこの先ずっと弱いままだ。いい返事を期待しているよ」

紅香さんは突如現れたスーツを着たポニーテールの女性の方と一緒に帰って行きました。

僕の答えはもうすでに決まっていた。

自分を変えたい！！こんな弱い自分を

この手で彼女を助けたい！！

僕はこの時知らなかった。運命は、どうしてこうもうまくいかない  
のであると……

「なぜあんなことを言ったのですか紅香様、あの方に武の才能がある  
とは思えないのですが」

疑問の念を抱く犬塚弥生、彼女はこの数年間、柔沢紅香の付き人を  
やっている忍びの末裔だ。

彼女の实力は九鬼英雄の付き人、忍足あずみと同等の实力者、その  
彼女が言うのだから確実であろう

「弥生今回の案件を思い出してみろ、崩月の遠縁の血筋探しの

依頼だ。」

「まさか！あの影の薄……違った……彼がそうだと！！」

「まあそういうことだ彼の両親、母親の方が崩月の血筋にあたるらしい」

師岡卓也の両親はいない、卓也が小さい頃に蒸発してしまっている。

今はおじいちゃんと二人暮らしだ

「でもな私は思うんだよ。武術の才能がなかったってあの子は、好きな子を守りたいがために必死に方法探していた。助けてやりたい」

その時の柔沢紅香の横顔は、なぜか母親のような微笑ましい顔をしていた。

弥生は驚いていたこの十数年、柔沢紅香という人間は仕事になれば冷静沈着、絶対失敗などしない

決して感情では動かない、もし動けば必ず失敗する。

そう、私たちの仕事はそんなに軽くわない

そんな世界にいる。

## 揉め事処理屋

宇佐美代行センターの個人事業と考えてもらってもいい、この仕事はピンからキリまであるのだが確実に柔沢紅香は一流の部類入るだろう。

そんな彼女があんなにも心を動かすとは、めずらしいトカゲがカブトムシと鉢合わせするくらいにめずらしい

弥生は、そんな紅香を見ながらあの幼き少年を思い出す。存在とか印象が薄かったがあのかに必死にすがりつくような目、彼の目だけが強く印象に残っていた。

「そうですね。私も助けてあげたいですね」

「おお！弥生が誰かを助けたいなんてめずらしい雨でも降るんじゃないか」

「紅香様に言われたくありませんね紅香様の場合、雨の変わりに核ミサイルでも降りそうですね」

二人は冗談を言いながら次の依頼に行くのであった

あの言葉から8年が過ぎた。

8年前僕は、紅香さんに連れられ紹介してもらった。

### 崩月流

それは川神流とは、違い決して表沙汰にならない流派

過去に裏十三家というものが存在していた。

近現代まで、この国の裏社会で勢力を持っていた十三の家系のこと

歪空	墮花	斬島	円堂	崩月	虚村
豪我					
師水	戒園	御巫	病葉	亞城	星嚙

今までは、その半数近くが廃業あるいは断絶しているがその有名・悪名・凶名は未だに

裏世界で影響を残しているという

紅香さんが言うには、僕は崩月の遠縁らしい

母親がそうだと言っていた。でも僕にとって母親っていつでも  
いまいちピンとこない

なぜなら母親と一緒に過ごした記憶がほとんどないのだから  
だから何にも感じない、でも今になってはその母親に感謝している  
そのおかげで彼女を助けられる力を手に入れられるからだ。  
当時の僕はそう思っていた。

崩月での修行は地獄だった

修業とは常軌を逸した肉体改造、体中の骨で折れる場所がない  
何度も折られ砕かれ叩き潰され内臓の位置が変わるような修行に明  
け暮れた。

それほど僕は強くなりたかった。学校で彼女が苛められるのを見る  
といてもたつてもいられなかった

彼女は、もっと僕よりも痛い思いをしているはずだ！そう思う  
と心が苦しかった。

風間ファミリーでは、武術を習っていることは黙っていた。女の子  
を助けるために習っていることがばれたらガクトや大和に馬鹿にさ

れるのが嫌だったしそれ以上に恥ずかしかった。

ひたすらに学校から下校しそして崩月家で修業し自宅に帰るそれが毎日のように続いた。

だがそんな日々の中でつらいことが2つあった

#### 一つ目

おじいちゃんが亡くなった。

あれほど身寄りのない僕をここまで育ててくれた人  
そんなことがあってもいつも味方でいてくれた。

死ぬ直前まで僕のことを心配してくれた僕が武術を学びたいと言っ  
た時

誰よりも応援してくれた人、心の中がポツカリ穴が開いたよな感  
じでとても悲しかった。その後、僕を引き取ってくれたのは、崩月  
家の人たちでした。僕のことを家族同然のように厳しく育ててくれ  
てた

#### 二つ目

椎名京が大和のおかげで助かったこと。

僕はそれを聞いた時、愕然としてしまった……

だって僕にとって彼女を助けるために武術を学んだからだ。結局僕がやっていたことはただの道化だった。

こんな情けない自分を変えたいと思う一方で僕は彼女を助けたかった。大和やキャップのようなヒーローになりたかった。

道化がいくらがんばっても決してヒーローにはなれない。ただ馬鹿にされ笑われるだけ

京を助けた大和にも嫉妬してしまった、大和は何でも簡単に解決してしまう。僕にはそう見えてしまう

京と仲良くしている大和を見てしまうと、心がうずいてしまう

僕の中のマグマのような醜い嫉妬を小さな理性で抑えるのがやっとだった。

こんなシヨックなことがあっても人間っていうものは不思議だなんて僕は思う。

初めは彼女のために続けた武道だったが、目的をなくした今でも武

道だけは続けた……

僕は自然とまた風間ファミリーの中で「常識人」というのポジションに舞い戻っていた。

この初恋と武術を心の中の奥底に残して……

そして風間ファミリーの常識人として……

## 第2話 過去（後書き）

紅香と弥生こんなこと言わないですよね・・・すみません・・・

感想お待ちしてます!!

### 第3話 夢（前書き）

言い訳させてください。上書き保存し忘れて

データが飛んでしまったんです。それで更新が遅くなったです。

原作ブレイクと書いておきながら、原作通りで面白くないと思います。

それでも読んでくれたら幸いです。

どうか見捨てないで〜

### 第3話 夢

俺、直江大和は夢を見ていた……それはとても昔のこと

そう……たしか8年前のことだ。

最古メンバーはたしか、姉さん、キャップ、ワン子、ガクト

そしてモロだ。京がメンバー加入する直前の話

あの時のモロの印象がかなり強くて当時の俺は決して忘れることはなかった。

いつも俺たち、風間ファミリーは、土管のある秘密基地で遊んでいた。

「今日は鬼ごっこをするぞー」

威勢のいいキャップの声でみんな集まってくる。

「みんな俺の指にとーまーれー!!」

「俺様いちば〜ん!!」

「誰であっても一番は渡さないわ〜」

「おい！！ワン子やめろ！！俺様の邪魔をするな」

「ガクトだって邪魔よ！！その無駄に長い身長と体見てて気持ちが悪いら。将来それじゃあ彼女もできないわよ」

「うるせえ！！余計な御世話だ！！俺様、将来高校生になってる頃には女が捨てるほどいてハーレムになっているだろうよ！！ワン子にはこの俺様の魅力に気づかないとはつくづく損してるぜ！！まあその点モモ先輩！！この俺様を見てどう思いますか！」

小さきながらも力こぶを見せつけながらいうガクトであつたが見ていて非常に暑苦しいしそして気持ちが悪い

「うるさいなこの筋肉……骨の一本もらっていいかな？なあ弟」

そついいながら姉さんは俺の頭を”グシャグシャ”していじつてくる。

とてもめんどくさいけどしかたがないのだ。普段の俺ならはねのけているのだが、直江大和は川神百代の舎弟でありそんなことをすれば、どうなことがあれ骨抜きにされてしまう（性的な意味ではなく物理的な意味で）

「駄目だよ姉さんガクトだって一生懸命生きてるんだよ、しかも絶対叶わない夢を見みて、だから許してあげよう」

「おい！！大和まで……モモ先輩それはないぜ」

ガクトは泣いていた心底から、まあガクトだから同情しないけど

「そついえばモロはどこに行った????」

「モロなら俺様ところに連絡来てたぜ！！なんか今日も家の用事があるって後からくるって言った」

キャップとガクトの会話を聞いて思うことがある、最近のモロは付き合いが悪い、何をやっているのかも教えてくれないし

いつも遊びの誘いをいれてもすぐ「用事があるから」と言って断ってしまっ、はっきり言って仲間として心配だ。

「とりあえず今のメンバーで鬼ごっこしようぜ！..」

「.....あの〜.....」

突然声が聞こえたそれは俺らメンバーじゃない人の声

「私も……一緒に(……おい!!椎名菌かよ!!)」

突然声をかけたのは椎名京だった。それに過激に反応するガクトいちいちうるさいなコイツ

「椎名菌が何のようだ菌が移るから向こう行けよ……(ゴキ!!)痛てえ」

姉さんがガクトの腕を一本折ったようだ。見る限り腕が違う方向に曲がっていて、それでいて姉さんの顔が怖かったホントにマジで!!

「あまり私を怒らせることを言うなよ」そういう陰気なイジメは嫌いなんだ。次そんなこと言えばもう一本折るからな」

ゴキ!!っと音を鳴らしてガクトの折れた腕を直す姉さん腕の骨を自由自在に直せるなんて……

「ワカリマシタもう言いません俺様何もイイマセン」

完全に鯉が川からあげられ干からびているようなガクトを見ると虚しくなってきた……

あまり見ないでおこう、こっちまでやられたら、かなわないし

「それで俺たち風間ファミリーに何か用か？」

キャップがどこかの応援団長のごとく胸を張りながら言った。

「私も……一緒に……鬼ごっこ……したい」

それは椎名にとっての懸命な訴えだった。クラスの中でも嫌われて友達という存在が皆無な椎名の言葉、普通の奴なら仲間に入れるところか目さえ合わさないだろう。別に俺は嫌いではないけど、もし椎名が入って俺の仲間たちがイジメの標的になれば我慢ならない、はつきりいえば入れるのは反対だ。リスクが大きすぎる。

俺の思いを感じたかキャップは陽気に喋り始めた。

「そうだな、今モロがちょうどいないし！その穴埋めで椎名だったっけ？入ってもらおうか！」

軽い――――――！！！！

え？え！ええっ？マジっすか！キャップさん。

全然俺の思い全然通じてないし……ていうかその返答にうなずいている姉さん、ガクト以外みんな同じ気持ちだったみたい

え、俺！？、もともと入れるつもりだったよ？ウェルカム！まったく何を見てるのかな読者たちは、hahaha！！そんな白い目で見られても困るぜ……ごめんなさい

「みんな俺の意見に問題ないみたいだし、それじゃあ、鬼ごっこ始

めるか!」

思いの他、京を入れたメンバーでの鬼ごっこは楽しかった。特に姉さんだけは、あまりにも速すぎて捕まえることができなかつたけど

……

結局その日モロは、現れることはなかつた。来るって言うてたのに、約束を破るなんてモロにも事情があるのかもしれないが、連絡のやつや二つだしてほしかった。

俺は、そんなモロにイライラしてたまらなかつたよ、ううゝムカつくぜ

夕日が沈み、鬼ごっこも終盤に差し掛かつた頃、姉さんがしきりにこつちを見てくる……あれは何か企んでいる顔だ。

「さーって明日のインドネシア株どうなってるかわからないし、ささと帰って確認でもスルカナー」

ガシツ! って姉さんに肩を掴まれた。やばい逃げなきゃ!!

「なあゝ弟ゝ今私から逃げようと思わなかつたか?」

「え!? なんのことかな? 全然言っている意味わかんないな」

ゲームオーバー……逃げられないし、なんでか知らないが心の中読まれてる!!

「いやゝ俺が姉さんから逃げるなんてそんなことするわけないじゃないか!」

「声が裏返ってるぞ！弟」

「……………すみません……………」

「それでいい」

姉さんは、俺の首に腕を回してきて鬼ごっこで鬼になっている椎名を見てしゃべり始めた。

「多分椎名は、弟お前に怖がっているところがある。」

「お！俺もそう思ったぜ！！」

便乗してキャップも乗ってくる。なんだこいつら

「というわけで大和！！お前の知力で、椎名のイジメを解決してこい」

「私のセリフをとるなよ、キャップ」

姉さんとキャップに椎名のイジメを解決の命令がきたわけだ。正直めんどくせ〜なんで俺が…………

翌日、クラスで椎名をイジメている方々に O H A N A S I をさせてもらった。

姉さんのことをチラつかせたらすぐにやめた。姉さんただ恐れられてるのやら

うわさの方もなんとか情報操作して封殺させることに成功したこれで、しばらくは椎名のうわさは流れないだろう。

そんな中で、突然モロが俺に問いかけてきた。

「大和僕が助けて言った時は、助けにきてくれなかったのに何で今になって助ける気になったの？」

「あー気まぐれだよ、気まぐれ」

俺はそう答えた。なんの考えもなしに

「そうなんだ・・・ありがとう・・・彼女を救ってくれて」  
その時のモロの顔ときたら・・・悲しいような怒っているようなうれいような楽しいような

どのような表情にも当てはまらない表情をしていた。

モロはあれ以来、何も変化もなく普通に接していた。

俺は昔、ませガキで仲間のことモロのことを深く考えなかった気がする

モロがあんなにも感情をおさえていたことにも気づかず……

朝起きてるとそこには京の顔があった。そのまま京の顔が徐々に近づき女性特有の匂いがふあってきて

「大和〜おはようそして好き」

「うおー!!あぶねえ」

キスを寸前で避ける

「いきなり何しやがる!!びっくりした!!」

「いや既成事実を作ろうと思って……」

「おはよう京、そしてお友達で」

「ふられた……」

京は毎朝、大和を起こしにくる。襲われる。

別に頼んでいないのだが、京はやめようとしなない。それは椎名京が直江大和に惚れているからだ。こんなことを第三者から聞けば「死ね!」「殺す」などの罵倒があってもおかしくはないだろう

「朝ごはんできている」

「わかった」

「さあ大和く私が朝ごはんだよく召し上がれ……きゃあ言っちゃった」

「京さん、着替えたいので出て行ってもらえないですか? 無視」

「スルーされた……まさか!大和!!彼女出来たの!?ズボン脱いで!!!確かめる!!」

そう言って京は大和のズボンに襲いにかかる

「や、やめろー！！お前の思考回路は犬並みか！」

ズボンの取りあいに格闘すること

十数分後

「はあーはあー毎日こんなことしていたら身が持たないぞ京ー！」

「私だって大和のハードなプレイで身が持たないよー」

「いつどこでハードなプレイを所望したー！！もし、していたら京ー！お前はもつとへばっているはずだー！」

「え！大和！私としてくれる（キラキラ）」

京は目を輝かせながら上目づかいでこっちを見てくる。  
それに俺はクラッって一目が眩むが……

「だがー！！断るー！！」

「むむむ……おいしい……」

やはり京の策やくであったあぶない!! もう少しで落ちるところだった。こんな攻防戦を毎日続けてる俺って………

「制服ここに置いておくから」

京は大和の部屋から出ていく

「あんな懐かしい夢久しぶりに見たな、モロのあんな顔そっぴいえばあの時以来見ていないな」

どこかしら彼女みたく心配する大和であった。

早朝

崩月家での朝は早い午前5時に起きて僕が日課にしていること

修行だ、僕はこれを毎日欠かさずやっている。体が追い付けなくなるとあるお方に怒られるからだ。

あのお方が怒るとホントに怖い”ブルブル” 大事なことは2度言います

「もうそろそろ学校だなく準備していこうつと」

僕もあれから8年間かなり長い時間だったと思う。

今もこうやって育ててくれた。崩月の人たちにはホント感謝している

「行つてきます」

崩月家の門を出る、今日も快晴、川神学園までかなり距離がある。

今日もみんな元気にしてるかな

細々と思つ卓也であつた。

### 第3話 夢（後書き）

主人公のモロが全然出てない・・・

次モロのこと書ければいいな

感想等、お待ちしてます

#### 第4話 日常（前書き）

最近、自分の文才のなさに腹立つ日々が続いています。

一応、モロのことを書いたつもりです。

こんなゴミみたいな作者の書いた文をよんでやってくださいませえ W

## 第4話 日常

寒さが残っていた3月を過ぎ、月日が変わり何事もなかったような陽気でぽかぽか暖かい4月、こんな日は、家でゴロゴロしながらゲームをしたいと思う

風間ファミリーでも、川神学園でも、こんなやついたっけ？と思われるくらい、髪型も雰囲気も何から何まで普通、存在が薄い師岡卓也はここにいた。

正確には、崩月家と川神学園のちょうど中間地点、コンビニで週刊ジャソプを買っているところである。

「今日のジャソプ最高だな、特にトラブルンのこの話、ヒロインのがアメーバの捕まっているシーンといいこのパンツもなかなか…グヘヘノノ」

いや、違ったここにいたのはただの変態である。

卓也は、崩月家から川神学園まで、電車でいえば十数駅にもなる距離をいつも走っている。

これも修行の一環だ。

さして武の才能がない僕が、人の何十倍も努力をしなければならぬ。

ホントは、もうやらなくっていいんだけどね。しかしこのパンツ滅茶苦茶いいな。

最初の頃は、電車通学で川神学園に行っていた。

でも、なぜか僕が乗るたび、女性の人が僕のことをジロジロ見ているような気がする。

その視線に耐えれなくて途中下車が多くなっていった。

僕はその日以来、仲間内以外女性に対して、目線に気にしてしまうようになってしまった。

見られると心が”ギュー”ってなって汗が出てくるようになり、ここに居場所がないような不安感が出てきて、いてもたってもいられなくなってしまう。

軽く女性恐怖症になってしまっていた。僕って情けなさすぎる

いくら体を鍛えて強くなったって所詮、心が弱ければ何もならない。土壇場になると足が震えだす、いくら脳内で「止まれ」と命令したところで、全然、震えが止まらない

こんな事じゃいつまでたっても弱いままだ。あの時の紅香さんの言った言葉が心に突き刺さる。

多馬川の土手沿いを歩いていると急にむさ苦しい声が聞こえる。

「お〜いモロ〜」

そこには見るからに無理やりラーメン100杯分食えって言われて嘔吐してしまいそうなの

暑苦しいガクトの姿（武力95）がそこにいた。その後ろから、風間ファミリーこと、大和、京、ワンコ、が見える、そういえばモモ先輩とキャップがいない

「おはようみんな〜モモ先輩とキャップは？」

「キャップはいつものでモモ先輩はまだ会っていない」

キャップは、いつも放浪癖がある今度はどこに、行ったのやら

「おはよう師岡卓也。2-F所属趣味ネットや漫画そして地味」

「なんだよ！！そのえらく説明的だな！！そして地味って……（泣）」

「モロの存在が薄すぎて、こうでもしないと忘れちゃいそうで」

京ひどいよ〜僕のこと忘れちゃいそうになるなんて、しかもそんなに大和にくっついて、腕まで組んでいる

あーヤバい、怒りを通り越して鬱になってきた。京はあれから仕切りに大和にアピールしている。今のところ大和は、友達として接してみたいけど、腕を組まれてまんざらでもないような顔をしている、近いうちに大和は、京の思いを受け止めるのだろうか、もし受け止めた場合、その時僕は、耐えることができるのだろうか、多分耐えることなんてできない。

大和は僕の友達で、風間ファミリーにおける参謀役なのに、そんな大和に醜い嫉妬をしてしまう自分、自己嫌悪してしまう、これ以上いけば僕の心は壊れてしまつかもしれない。

京を見ていると、本当に好きなんだなって思う僕もあれぐらい京に積極的になれたら、まあ無理だけど

僕らが多馬大橋にかかる直前にさしかかると、そこには、大量のゴm……違った……不良の方々がいた。人数にすれば12ぐらいの集団、皆さんそれぞれ武器を持って目な

んか血走っているが見てわかる

あるものはバットを

あるものはナイフを

あるものは、鉄パイプを持っている。

さすがにあれは危ないんじゃない……いや大丈夫か、なぜなら今から戦

う相手は、美少女と書いて怪物なのだから  
アリの大軍が籠にむかつて戦いを挑むようなもの。完全に勝ち目がない。逆にあの不良の方々が心配だ。五体無事であることを祈るだけ……

「大和止めた方がいいんじゃない。」

「俺様もそう思うぜ。」

「あーわかった。少し止めてくるわ〜」

大和は、不良の方々に突っ込んでいった。必死に事情を話している。あれはどうも不良の方々が聞いていないみたい。あーあ、知らないやどうなっても

不良たちの後ろに美少女がいる。

するとその美少女は不良たちをテトリスに見立ててポコポコにし始めた。

丸顔の人には6発〜8発入れているのがわかる。どれもこれもが常人では見えないスピードだった。かろうじて崩月流のおかげで目で追うことができたが、それにしても速い

神速といえるほど域、それをコーヒーを入れるくらい日常的に軽くやっている彼女を怪物と言わず何と呼ぶべきか。……美少女か……

すると戦闘を終えた美少女と目が合ってしまった。いけない。条件反射なのか、見られることに慣れていない僕は、目をそらしてしま

美少女は、一瞬驚いた顔を見せ、何か僕に喋りかけようとするが、多馬大橋の上にいる観客によって遮られる。

「きゃーモモ先輩！！ステキーーーー！！！！！」

「さすがモモ先輩だけ一瞬であんなにいた不良を倒してしまったぜ」

「私を抱いてーーーー！！！」

すると美少女こと、モモ先輩の戦闘を見終えた京は、無機質的にはそぼそと京の口が開く

「一人一発ずつ蹴りを入れて、不愉快な笑いをしていた丸顔の人に  
は3発入れてたね」

「そ〜そうだなすごい蹴りだったな」

「さすがお姉様、かっこいいわ」

京の発言に同調するガクト滅茶苦茶、声が裏がっている。そんなに怖かったのだろうか。まああんなものを見せられたら無理もない。

「う〜そホントはパンチ」

「京！！嘘言うんじゃあねえよ！！」

「違うぞー！！京！！8発だー！！」

京の発言に訂正を入れるモモ先輩、ていうかここまで聞こえてるなんてどんだけ地獄耳なんだよ、あのお方は、でも仕切りに僕の方を見ている何だろう・・・

いやゝな予感をしながら、モモ先輩の方に駆け寄る風間ファミリィ  
(リーダー不在)

「お姉様今回もかつこよかつたわゝ私もお姉様みたいに強くなならなくちゃ」

いつも以上に張り切るワン子、タイヤを2つから3つに増やして先に進もうとする。

「ちよいまち、ワン子少し走りすぎだゝもっ少し体のことも大事にしないと」

「お姉様に追い付け追い越せなのよ！！お姉様」

なんだが高度経済成長の時に出てくる言葉だよゝそれ

「そついえばモロロ、私が戦っている時、一瞬目が合わなかったか？」

疑問に思ったのかしきりに僕に迫ってくるモモ先輩、胸あたりがち

ようど僕の顔の位置と同じなのですごくドキドキしてしまっ。

「知らないよ！！あんなに速い掌底見えてるわけないじゃないか。」

「ふーんそうか見間違いか」

「そうだぜ！！モモ先輩！！もやしっ子のモロが見えてるんだっから俺様なんかモモ先輩の下着すら見えてるぜ！！」

バキッ！！

エライ殺傷のありそうな音がする。ガクトの方に目を向けるとモモ先輩に手刀で落とされたみたいだ！！怖えー

「ガクトどうする？このまま置いていく？」

何気なしに置いていこうとする大和、以外に大和ってドSだね

「いいんじゃないか？こんな筋肉いても暑苦しいだけだし」

「お姉様がそうするのなら私はそれに従うわ！！」

「しょーもないー」

上からモモ先輩、ワン子、京とみんな身内に対してSのようだ。良かったね〜ガクト案外モテるじゃん！！

多数決の結果でガクトを置いていくことにした。ガクトの犠牲は決

して無駄にはしない．．．嘘です。後で僕が担いで学校までもって  
いきました。

途中大和に「モロ以外に力もちなんだな」とほめられた。伊達に崩  
月流を習っていない。

川神学園に入り、大和、京、ワン子、（ガクトも）僕たちは自分の  
クラスを目指す。京は、教室が近づいて行くほどに、ほとんどしや  
べらなくなっていていつて読書し始めた。

大和は通りすがりの知り合いに「おはよー」と声をかけられてい  
る。大和って他のクラスからも女子にも声をかけられるなんて、す  
ごくうらやましいな〜

その点僕は、仲間内以外で声をかけてもらっていない。声をかけて  
もらっても大和みたいに愛想良くなんてできないし、もし女性の場  
合ならその場で固まってる。

「ナオツち、椎名さん、ワン子、師岡君おはよー」

透き通ったなんとも可愛らしいを耳にしてしまった。確実に女性の声だ。一瞬僕に声をかけたんじゃないような不信感を抱いてしまった。

クラスでも学園でも人気の高い、小笠原さんだ。僕の苦手としている。この人に話しかけられたら必ずキョドってしまう、ランキングベスト3に入るお方

早くもキョドる。僕グダっている間に、大和とワン子があいさつされてしまった。

「おはよーー」

「おはよう〜おい京も!」

「うい……」

「おは……よ……う」

全然目を合わすことができなかった。うっ〜駄目だ〜ドキドキする。

「師岡くんってあいさつする時、全然目を合わさないよね? まあ別にいいんだけど」

捨て台詞のように吐いて自分の席に戻ってしまう小笠原さん。仕方がないんだよ!!

心の中で嘆く。はあ〜鬱だー

まだHRに時間があったので未だにドキドキする鼓動を抑えるためにトイレに駆け込む。

駄目だ駄目だ駄目だ。僕は、今でも弱い、どんだけ鍛えたって強くななんて……

「あ！！！！いたいた！！師岡卓也！！私とプレミアムに真剣で勝負しなさい！！！」

この時僕は、このちんちくりんのアマの言っていることが理解できなかつた。

## 第4話 日常（後書き）

次は、戦闘シーンを書こうと思います。

そんなに期待しないでください！！

なんでも初めてなもんでうまく書けるか自信がなくて、

でも頑張りたいと思います！！

## 第5話 対決!?(前書き)

すみません、嘘つきました。戦闘シーン書くつもりでしたが……  
あまりにも長くなったのでここで区切らせてもらいます。

わずかながら期待していた、読者の方々ほんと申し訳ない……

後、更新の方も少し遅くなります。リアルが忙しくて……

## 第5話 対決!?

「あー! いたいた! 師岡卓也!! 私とプレミウムに真剣に勝負しなさい!」

この言葉は、まず日本語であろうか? いやドイツ語? それとも...  
...英語???

頭の中がぐちゃぐちゃになっている。落ち着かせるために、トイレに行こうと思ったのに、

まさかここに伏兵がいるなんて、誰かの精神攻撃? 機関の陰謀?、卓也が混乱している時にこのちんちくりんはとんでもないことを吐き捨ててきた。

「まあホントは、あんたみたいな、2年生の一番雑魚を相手にするなんて、プレミウムな私にとって不本意なんだけど」

「(だったら決闘なんて挑まないでくれよ.....)」

決闘システムここ川神学園行われるシステムのこと

生徒同士の競争率を高めるために設置されてる。

お互いの同意で、スポーツ、勉学、仕合いなどで生徒同士で、勝負することができ、

ただし、仕合いだけは教員の監視が必要となる。

卓也は心の底から思った。こんな地味で普通、何をやっても平均な卓也に決闘を挑むことが理解できないと

「なんで僕なのさー他にもたくさんいるじゃないか!」

「2年生にと戦う際、やっぱり初戦は、やっぱり勝っておかないとね  
くプ・レ・ミ・ア・ムな私が負ける気なんてさらさらないんだけど」  
なるほど要は景気づけ……僕みたいな弱そうな奴を叩くわけだ。なんと狡い考えである  
ていつか災難だろう……

断ることも出来たのだが、こんな草食系男子な卓也の中にも「負けたくない!」という対抗心が少しうずきだした。年下に馬鹿にされて、自分が必死に習ってきた武道を馬鹿にされたみたいで悔しい……駄目だ!いけない!!こんなこと思っちゃいけない!!

心とは裏腹に言葉として発してしまう。

「わかったやろうよ。当然仕合いだよね?」

その言葉に意外だったのか、ちんちくりんのこと武蔵小杉は噛みつく。

「もちろん仕合いよ!!先生には私が伝えるわ!」

HRが終わりかけの廊下、男女二人、もし仕合いか抜きにすれば、告白シーンではなかるうかギャルゲー好きの大串スグルならこう言

うに違いない。

「CGシーンが回収できると」だがこの二人はそんな甘酸っぱい青春はなかった。

「あなたも出しなさいよ!!」

ワッペンを投げつける。これが決闘の合図、受けるのならここで卓也もワッペンを重ねて初めて決闘が成立する。

今ならまだ引き返せる。土下座でもなんでもすれば、許してもらいえる。でも、それだとずっと弱いままだ!!僕は、こんな自分が嫌で武道を習ってきた。

結果的に彼女を僕の手で救うことはできなかったけど、自分が変わったところを証明しなきゃいけない!!、ここは勝負しなきゃ!!  
対決だ!!

「うん!!わかってるよ!!」

ワッペンを重ねる。これで決闘が成立した。

正式に決闘の日程は2日後、場所は、体育館と決まった。

いつもの多馬川、変わり映えしない敵、観客の声援、なんもかわらない日常、

川神百代は、そんな日常に飽き飽きしている部分がある、しかし、唯一百代にとってこんな平凡な日常に

つながとめている存在ある、風間ファミリーのメンバー。キャップ、京、ワンコ、弟、ガクト、モロ

こいつらといると、楽しくてやまない一生一緒に過ごしたいとすら思う、だが百代だってもう高校3年生、考える。

時間が過ぎれば、みんな一緒にはいられなることに、さらに仲間内でも抑えきれない物がある、

## 戦闘衝動

これは、なんというか仕方がない…自分の性だから…どんだけ戦っても満たされること決してない。

なぜなら百代にとってだれであろうとも自分より劣っているからである。そんな彼女が興味、疑問の念を抱いた瞬間があった。

それは、百代が不良を絡まれている時のこと、

9人〜12人構成で組まれている不良集団、それぞれ武器を持ち今でも百代に殴りかかる勢いだ。

そんな奴らほど”ドS”にボコボコにしたくなる百代である。まず、複数で、かかってくるところが気に入くない。

男なら正々堂々タイマンで、勝負しろと百代は思ってしまう。他の奴からしたら、こんな美少女かいらつを一人で相手するなんて、何のバツゲームであろうか。

百代は、常人では見えないスピードで次々に不良共を痛めつけていく、まるでそこら一帯が暴風でも直撃しているのかの如く……

そんな中、不意にモロロの目と合った。

「!!!!」

あまりのことで、驚きを隠せなかった。まさか、何かの偶然であろう、百代は即座に思った。

一般人である、モロロが私の動きをとらえることなんてできるわけがない。ましてや武道の心得を持っていない者に、当然百代の姿をとらえることなんてできやしない

ますます疑問が膨らむばかり…まあ聞いて確かめればわかることなのだが、

「おい！モロ……（きゃーモモ先輩！！ステキーーーー！！！！）」

突然、歓声によってさえぎられる、今この時だけは、邪魔だな〜と思ってしまう百代、

遠くから一部始終を見ていた京が細々としゃべり始めた。

「一人一発ずつ蹴りを入れて、不愉快な笑いをしていた丸顔の人には3発入れてたね〜」

……

……

…

「う〜そホントはパンチ〜」

ふーん、まだまだ京も甘いな、ホントのところ汚らしい笑いをして  
いた男には、合計で8発のパンチではなく掌底をくらわせてやった  
のだ。

だが、弓使いの京にしては、なかなかすごいところであろう。並の  
武道家なら早すぎて理解も出来ないと思うし、その分、京はかなり  
成長している。

これは、将来が楽しみだ。

「違うぞー！！京！！8発だー！！」

まあ間違いだからな

「将来もつと強くなれ」という意味を込めて訂正してやる。

さあーて次は、このチキンなモロロにも聞いておかないといけないな

女性観客の視線に少しだけイモっているモロロを見ると、とても百代の動きを見切っているようには、思えないのだが、

「そういえばモロロ、私が戦っている時、一瞬目が合わなかったか？」

するとモロロの口からおもしろい答えが返ってきた。

「知らないよ！！あんなに速い掌底見えてるわけないじゃないか。」

百代は確信した。

「モロロは何かをやっている」とそれは具体的にはわからない、詳しく聞きたいが、グーっと自制する。

いつも百代は、何がと戦いのことになると見切り発車して最終的に

相手を不機嫌にさせてしまって、変になることが多々ある。

（また機会があれば、モロの実力どこかでお目にかかれるだろう、その時までには、楽しみに待っておこう）

百代は妖艶の笑みを浮かべ獲物を逃がさないような瞳でモロをじっと見つめていた……………

やってしまったああああああああああああああああ！！！！！！

今さっきまでの自分の行動に嫌気がさす……………

「はあくなんであんなこと言ってしまったのだろっ」

卓也は、生まれてきたことに後悔しながら自分の教室に戻る途中。

行くところどこに、他の生徒が卓也のドス黒い鬱オーラを感じて顔を引きずりながら

避けて通っている、中には、「あれ……何？……ダイクマター未元物質？」、「あんな生物、うちの学園にいたか？」など、完全に、生き物扱いしてない発言が飛び出していた。

すると、後ろから勢いよくダッシュしてくる奴とすれ違う。「なんだろう？」と目を凝らして確かめてみると

そこには、エロという代名詞である意味有名な福本育郎が卓也を通り過ぎて行った。

「はあっ……はあっ……はあ、福本育郎います！」

もうすでにHRの時間が過ぎてしまっていたようだ。すでにクラスのみんなは着席していて卓也とヨンパチだけの席が空いていた。

「（うわ。今来るとか……こいつらアホすぎるんですけど）」  
心の中で呟く小笠原千花

「う、ウメ先生。セーフでしょうか？」

「既に出欠は取り終えた」

ビッシー！とムチがしなる音がする。

「げ!？」

「つまりお前は遅刻というわけだ、福本育郎」

「すみませんでした!！」

「理由あがれば聞こう」

「い、いえ、あの、朝起きたら凄い時間で」

「寝坊というわけだ。情状酌量の余地なし!」

鬼小島こと小島梅子は、ヨンパチ（福本育郎）を鞭で叩きつける。

するとヨンパチは叩かれて気持ち良かったのか息が荒くなり始めた。

「痛いか!！福本!！」

「はあ、はあ、はあ、痛いです」

なぜか、少しだけ……ほんの少しだけ、ムチで叩かれて喘いでいるヨンパチを見ているとつらやましいと思ってしまうた。

ヨンパチを教育し終えた小島先生は、卓也に矛先を変えた。

「次は、師岡なんで遅れてきた？」

「いえ……理由も何ありません……僕なんて……」

「そつかなら師岡も教育的指導を……！！！」

この時、小島梅子は、気づいてしまった。

師岡卓也の背後にある。どす黒い鬱オーラにそれは、川神学園の教師の鑑とも言われ裏からでは”鬼小島”と謳われる

小島梅子でも同情し引くほど凶悪で、とても濃いオーラであった。

「も……も……師岡！？大丈夫か！！何があつた！？先生は何時でも相談に乗るぞ！？」

ついに、鬼小島にも同情されてしまった。

（先生に同情されるなんて今の僕、どんな顔をしてるのだろうか……多分、子供にいじられて瀕死状態のアブラゼミのような顔にでもなっているんだろう……あははは〜！）

今日一日、何の授業をやったのか、何を食べたのか、全く記憶になかった。途中、大和に大丈夫？と声をかけられて心配かけてしまった。

キャップがテレビでニュースに取り上げられていることを後で知った。

「おい！！モロ〜今日ゲーセン寄って行かねえか？BB稼働中だつてよ」

卓也を心配してくれてなのかギャルゲー好きの大串スグル、とヨンパチが声をかけてくれた。

落ち込んでるときに、気軽に声をかけてくれるのは正直うれしい。

「うん！行こうか！！」

「今日は脱衣麻雀でポインな女の子落としてやるぜ！！！！」

「なら決まりだな、スイーツ（笑）が言っていたことなんて気にするなよ所詮、3次元の女が何を考えてるかわからんからな」

「あはは〜ありがとうなんか気を使わせたね〜」

「大丈夫だ！！あの女は、俺の妄想の中で、ちゃんとシャブらせといたら！！安心しろモロ！！」

「なんかそれ！虚しいな〜想像の中でしか実行できないなんて」

ゲームセンターに着いた卓也たちは、各自で遊びたいゲームへと散開した。

こういう気分がすぐれない時は、ゲームに限る。他人からすればなんとまあ駄目な発想だろう。

だが卓也にとつて、こういう時、ゲームや好きなアニメ、漫画に逃げるしかできない。

後、48時間後には、もうあのプレミヤムのちんちくりんと戦わな  
いといけないからだ！鬱にもなるし、できることなら逃げたい！

気分ではいえばやけ酒みたいなもの、その分卓也は、学生的身である  
ので酒は禁止されている、その代りに  
ゲーセンでということだ。いわゆる、やけゲーセンみたいな……

「俺は、宣言通り脱衣麻雀してくるぜ。」

「さて戦国大戦始めるか……モロはどうする？」

「なら僕は、格ゲーでもしようかな」

「北陸の拳にブレイズブルーが置いてある！！これ好きなんだよね  
〜あ！誰かやっている！相手はユダか  
よ〜し持ちキャラのラ・Oで勝負だ！！」

1p側を見てみると誰かやっているみたいだ。

卓也は北陸の拳の台に100玉を入れ、乱入する、キャラクターを  
選び、対戦。

なかなかこの辺の地区では強いがまだ倒せる範囲だ。ちんちくりん  
で受けた屈辱と後2日で勝負することを忘れるかのように相手をボ

コボコにする。鬱憤を晴らすかの如く。

「よし！勝った！！」

「あ！また乱入してきた！！負けず嫌いだな！げ！」ジョインジョイントキイ”だよ！”

そう今卓也と戦くキャラ、ジョインジョイントキイこの北陸の拳での三強と言われているキャラである。普通に戦えばまず負ける

「でも、がんばれば！勝てる！！」

卓也はがんばった。あらゆる攻撃をガードし攻めれるところで攻め、必殺技で決める。

このゲームのように実践の武道で試したらいいのだが、不器用な卓也には少し無茶であった。

「また勝った！！！！」

すると1p側から、くやしそうな女性の声が聞こえる。

「ジョインジョイントキイでも負けた！！！！」

卓也の中でドクン！！ドクン！！って心臓の音をが聞こえてきたこの感じは女性恐怖症の特有の合図。

「お前、強いな！！ウチこのゲームあんまりやんないんだ」

赤髪かったツインテール、雰囲気というのか直感というのか、な

んだか一癖二癖のありそうな女の子が卓也に喋りかけてきた。

「だ・か・ら！これがうちの實力やと思われたら困る。お前ブレイズとかパーチエとかできるか？」

気軽に声をかけてくる女の子に対して卓也はビビるにビビった。

（なんでこんな初対面なのに話かけてくるんだ！！お金なんて持ってないよ！！何が目的？どうしよう）

もうパニック状態である。

「おい！聞いているか！？」

「え！……うん……一応できる……かな……？」

「それじゃあ、こっちでウチと対戦してくれ！！」

彼女は卓也の腕を引っ張り出す。僅かではあるが小さい乳房が卓也の腕に感触がある。

「！……！！」

卓也のライフポイントが0という死へのレールに乗ってしまった。あと数秒で、何とかしなければ……

ツインタールのポケットから携帯が鳴り響いた。

「げ！！こんな時間に呼び出した！！勝負はまた今度な！！……おいリュウ戻るぞ！！」

「なんとか解放された……かわいいけど……変な女性だな」

気を取り直して卓也は北陸の拳の代を後にしてブレイズの代に行く  
するとそこには、さっき見た女の子よりも比ではななくらいの  
変な女の子がブレイズの代で対戦をしていた。

その女の子の額には、巖流島と書かれた帯を結び、時代遅れにもほ  
どがある下駄、そのポニーテールが異様に思える白いリボンで結ん  
でいた。

格好から予想して新撰組の衣装が何かを身に着けている。卓也の目  
線に気づいたのか女の子は、ブレイズのゲームをしながら答える。

「バストは85だよ！去年より1センチ上がって今のブラでもきつ  
くなり始めました！」

「えー！」

「だって君私の胸を見てたんじゃないの？」

「別にそんな意味で見ても……」

「ヒップは83だよ！安産型と自負してます。」

どこらしかと誇らしげだった

わけがわからない……その文字だけが卓也の頭を駆け巡る。

「だからちが……………」

「ウエストは勘弁ね〜少し自身がないかも」

えへへと恥ずかしそうに笑う女の子を見る肥満には程遠いスリムで魅力的な腰である。

「今日この辺でミニ撮影会があったのさ〜でそこで参加してきたの」

「コスプレ……………写真撮……………影？」

「そうそう！！君よく知ってるね！もしかして同業者かな？？？」

同じ匂いを嗅ぎつけてどこかうれしそうに答える。サムライ女の子

(今、名をつけた)

「いや〜なかなかよかったよ〜今着てる服が私の好きな川神戦隊サムライレンジャーのピンク役なんだけど、

ドジだし戦隊の中でも浮いてて、なんいていったらいいのかな〜最初はその戦隊の中に必要ないんじゃない？って思ってたんだよね」

この言葉にグサリ！！と心の中に剣がささる。僕もそうだ……………風間ファミリーでは必要とされてない存在、どうしていいかわからなくて

自分を変えたくて、武道を習ったけど今の現状を見てると全然変わってない、むしろ前より落ち込んでる方が多い気がする。

「でも、そのピンク！心は熱い奴なんだよね！私のお気に入りのキャラ！ここぞと、ばかりに敵怪人に向かって、お説教！色んな名言残していくから

私にぴゅあぴゅあハートをがちり掴むんだよね！歴代の戦隊物で一番好き」

サムライ女の子は、一気にまくしたてるように語り始めた。アニメ好きの卓也にとってもこのマシンガントークは若干引いてしまっぐらいに……

「私もう行かなくちゃいけないから！！この後の続きやってていいよ」

すると彼女は、こたなぶつに口を変えて、ブレイズの代を卓也に譲った。アーケードの8ステージまで行って後一回で終わりだった。

補足として、このブレイズブルー、2D格闘ゲーム今、コアのファンに人気の名作ゲームだ。

なぜか主人公格のキャラクターのラナが2-Sのロリコンの愛の戦士、井上準の声とそっくりである。

これは卓也の思い過ごしかもしれない。

「え！あ……あの……これ……」

卓也は女性恐怖症を発動しながら、うつろたえる。

「そういえば、自己紹介まだだったね。私の名前は、  
斬島 切彦、  
こう覚えた方が分かりやすいよ!!」

斬っても斬ってもなくならねえ!!まさかこれは!!ダークシャドウ黑影の能力  
の仕業か!!の(斬)に

宝島を探せ!!この世にすべてをそこにおいてきた!!の(島)に

私たち……ここまでね……おい!!……まだ俺たち……やり直せ  
るだろ!!もう無理よ!!俺と息子の健太を切るのか?  
(切)に

彦 ちゃ ってぶちやけどうよ?いやかわいいと思うよ!?

あれももしかして嫌いだった!うんなわけないだろ!!俺、滅  
茶苦茶好きだぜ!!誰がなんと言っても構わねえ!!むしろ愛して  
いると過言ではないね!!あれって性別

メスだったっけ?の「彦」

わかった?覚えやすかったでしょ?」

「いやむしろ……覚えにくいよ!!斬なんて何!?どっかの腐れた  
書店にぼろぼろになって売っている漫画だよ!!」

かといって島とかどっかの名セリフのパクリでしょ!!切とかもう  
仕事一筋のサラリーマンが家庭に関心なくていざ離婚しそうになっ  
て焦ってる人みただし

彦は………もうやだ!! ツッコミ疲れた!!!」

卓也は頑張った。彼女のあらゆるツッコミどころを突っ込んだ。これは才能と言っていていいだろう。

こんな才能なんていらなと思うのは卓也だけかもしれない……

「あははは!!! 君、面白いね、気に入ったよ!!! 全部ツッコミ入れようと思うなんて君しかないよ。あははは!!!」

彼女は笑い始めた。心の底から笑っているのが見て取れる……しまいには腹を押さえてその場でコロコロ転がりながら笑った。

「いや!!! 笑いすぎでしょ!!!」

即座にツッコム卓也、

彼女は涙を浮かべ上目づかいで卓也を見つめていた。

その表情に少しかわいいと思ってしまふ。だめだ!!! 僕には京っていう好きな人がいるのに!!!

「くう~~~~!!! じゃ! またどこかで会えると思うけど。その時は声かけてね。崩月の戦鬼くん」

彼女は、軽く舌を出し、ウィンクして卓也のもとを後にする。

一体なんだっただんだ!? まったく謎である。ていつか………崩月の戦鬼って!!!

卓也は振り返るとそこにはサムライ女の子はいなかった。慌てて気を探知しようとするが、姿も気配もなく、まるで煙のように……

ホント今日は変な女性によく合うな

軽く放心状態の卓也であったが、ヨンパチやスグルのことも変だと気づくのも時間の問題だった。

「ふっすっかり脱がしてやったぜ」

「あ！ヨンパチ」

「見てくれ！！連打すぎて爪が割れちゃった！！」

「命かけすぎでしょ！！」

「頑張つて連打してたら後ろの女に必死だ！！って言われて笑われた。

ム力つくから想像の中でアナルほってやったよ！！」

「僕たちも十分変か……」

虚しさが残るゲームセンターであった。

卓也はまだ知らない……彼女が裏十三家の家系の 斬島 の直系  
当主だと言うことも

裏の世界では、断頭者キロチンと謳われて恐れられ殺し屋だということにも

……

卓也が彼女のすべてを知るのは、もうちょっと先の話であった。

## 第5話 対決！？（後書き）

すみません。紅ファンならわかると思うのですが……

切彦のキャラを変更しました。

ちなみに作者は、BB好きです！！（格ゲー）持ちキャラは（  
使ってます！！

マジ恋ssに出したかった……

感想等お待ちしております！！

紅の切彦から電波的の雪姫に

個人的に雪姫を出したかった……

## 対決 直前（前書き）

すみません

先月から今月にかけてレポートが腐るほど出てきて書けませんでした（T-T）

ちなみにま・だ！！戦闘に入っていないです。

何時、戦闘にはいるのだろう……orz

## 対決 直前

決闘の日まで後24時間

この時の卓也の精神は限界点を超え鬱オーラが一層濃くなり他人からも風間ファミリーの中でも心配されるようになった。

「モロく大丈夫？顔色悪いよ」

「おいモロ！！どうした！？そんな陰気で平凡な顔で！！俺様みたいに抜いてるか！！？ちゃんと抜いてないからそんなにもやしっ子なんだよ！！」

「最低だねこの霊長類は…ところで大和は週に何回抜いてるのかな！？はあはあ」

「……………（無視）」

「放置プレイなんて堪らないよ！！」

仲間内の京とガクトが心配かけてしまった。心配してるんだよね！これ！

「平凡な顔は元からだし、今さら、もやしっ子言う単語も流行らないよ、まあガクトの頭弱いから仕方がないか」

「言いたい放題言ってくれるぜ！！まったくモロは〜」

ガクトは卓也の頭をぐりぐりと痛めつけてきた。

ちよ！痛い！痛いよ！

「そうだぜ〜モロ！なんだか借金作って、どこかの地下牢獄のに閉じ込められて間そこで働かないといけない人になってるぞ〜俺みために颯爽と風のように生きなきどこかの荒野を駆けまわる男にならないと」

「大丈夫だよ！心配してくれてありがとう……キャップに京ついでにガクト」

「ついではやめろや！〜！」

普段似合わないガクトがツッコミ役をかって出ている。まだまだツッコミレベルが低い

ちなみに今日の風間ファミリーはフルメンバーだったりする。リーダーである風間翔一は昨日ひったくり犯を捕まえて一躍川神市内では有名になっていたらしい。

どこに行っても見知らぬ女性、川神の学生などに声を掛けられる始末、

詳しくは僕は知らない……だってその時はその場にいなかったから

変態大橋にかかる直前、予測していたかのように変人に遭遇、これはいつものことだ。仕方がない。

人並みならぬスピードで大橋を多断している人力車が止まる。額に？印のキズ、見た目はとても成……ゴホン……お金持ちそう  
な…

ていつかお金持ちとメイドがここにいた。

「おはよう……庶民……うはははは……我こそは九・鬼・英・雄  
……である……」

皆のヒーローである……この紋章を目に焼き付けるがいい……」

「皆さんおはようございます」

一応挨拶する風間ファミリーのメンツたち、

「はよーございます」

「はよっすー！」

「なんだ！その顔は！！一子殿の腰巾着の……誰だったか？  
まあいい！どうした？税金でもきつくなったか？」

既に卓也の顔を忘れられていた。

まあいいんだけど……すると横にいたメイドが良からぬことを口走る。

「皆さんちゃんとお返事しないと命いただきますよ」

「でしゃばるな！！あずみ！！」

「申し訳ございません！！英雄様！！」

「（なんだろう……このやりとり……見るに堪えない光景だな）」

クラスの中はとても騒々しかった。なぜなら、川神の姉妹都市ドイツのリューベックというところから明日、転校生が来るらしい。

お祭り好きのキャップが胴元役を買って出て男か女か賭けようと言  
うのだ。

「断然女だー！！！！」

「いや、男だろ？」

「やっぱり女じゃねえとテンション上がらねえ！！」

色々な言葉が飛び交う最中、ヨンパチのセクハラ発言が飛び出す

「絶対！！女！！ちなみにポインな女なら、その胸揉みまくるぜ！！」

「キモい猿が何か言ってるんだけどー」

「やばい〜アタイ、身の危険感じるんですけどー」

小笠原さんと黒ギャルの羽黒黒子がヨンパチに対してすぐさま反撃

「うるせえ！！例えこの世がお前だけだったとしてもお前みたいな化け物クリーチャー抱かねえ！！」

「なんなのコイツ！！ちょーマスカラで目玉黒く塗りつぶしたいんですけどー」

「ドイツのベーグルから来るのね！！！！どんなやつかしら！！骨のある奴なら戦ってみたいわ〜」

「ワン子ってたまに天才発言するよね」

「そんなに褒めないでよ、照れるじゃない京」

「（ワン子完全に京に遊ばれてるよ……それ……間違えてるから……それだと何かしらのパンになってしまっ、正確には、リユーベック、決してベーグルではないよ）」

内心、卓也はワン子の言うことにツッコミを入れる

もうツッコミを発言するにもしんどくなってきた

明日、泣いても笑っても、武蔵小杉との決戦が迫っている。

結局は腹を括って行くしかないのだが、卓也は今になっておじけつき後悔してきた。

だが仕方がない自分でまいた種である。自業自得と言われても仕方がない。

「モロく大丈夫？何か悩み事あるなら相談乗るわよ」

ワン子が、一本数十キロあるダンベルを持ち上げつづらな瞳で、こっちを見ている。ワン子を見ると自分の抱えている問題なんて小さく思えてくる。和んで仕方がない、

まさに風間ファミリーにおけるペット役である

「いや、これは僕の問題だし……別に大したことじゃないよ、心配

してくれてありがとうワン子」

「そうなの？じゃあわかったわ！！何かあれば呼んでよ！！すぐに助けるから！！」

大したことであるのに言えない卓也

仲間としてこれ以上心配をかけたくない。もうすでに手遅れに近い状態だが……

「（もうやるしかないんだ……僕がやるしかない……大丈夫……きつと勝てる……相手は女だし……見たところ武道少しかじっている位のレベル……）」

卓也は、自分自身を激励する、そして明日を迎える……だが卓也は想像つかない……明日の仕合いがあんなことになるろうことに……

私はこの時を待っていた……私が対戦する相手……他者からすれば、軽い通過点、いやそれ以上に簡単と思われる壁

違う！！！！こんなことを思う奴がいるのなら私はこの場で真っ先にぶった倒してやる！！！！

そう……私にとって2年生を制圧するため、あの人に認めてもらいたいため今まで頑張ってきた。私の2年生初戦の相手、決して負けられない戦い、どうしても叩かないといけない相手……アイツに勝つて私は身も心も一段と進化する

自分の強さをあの方に見せつけることができる!!!多分大勢の人は、勝つて当たり前だと思いが私は思わない……

油断もしないし慢心だつてしない!!!最初っから全力で叩く!!!

師岡卓也

仕合いを申し込んだあの日、アイツは足を震わせながらも私の申しでを受けた……

この名前を聞くたび……私の心の中が疼いて堪らない……絶対に勝つ!!どんな手を使っても!!!

そして認めてもらおう!!!あんな奴より!!!私の方が優秀でああなたの弟子にふさわしいことも……

戦って勝つ!!!そのためにもアイツを絶対に……

ついにこの日がやってきた。僕と武蔵小杉との仕合い。ちなみに僕の初実戦だったりする。

普段は、崩月家のあのお方と実戦に近い練習をするのだが、今回はまったく違う、相手との手加減なしの真剣勝負

僕は、少し震えていた拳を握りなおす。そうすると少し緊張がほぐれる気がしたからだ。

やっぱり実戦は違うな……こんなにも緊張したりするものなのかな？……

そう考えるとモモ先輩のすごさ身をもってわかる気がする。毎日というほどの挑戦者と戦ってきて常軌を逸した戦いを

なんども勝利を納めている。あれこそが武人、武の頂点に君臨しているのも納得できる。

ちなみに今はHRを過ぎた時間帯、ここ体育館で今まさに仕合いを行うところだ

両者の間が3メートルぐらい離れていてその間に川神学園の体育教師ルーイーが立っている

この埃臭さと空気が乾燥している体育館の中、僕は大きく深呼吸し程よく緊張をほぐす。さすがに埃の多さでむせ返ってしまう今まで無口であった。武蔵小杉が僕に対して挑発してきた。

「何？緊張してるの？情けないわね？あんたそれでも男なの？そんなことだから友達一人もいなんじゃない！！」

「緊張しているだけで……友達一人扱いは……ひどいな……それ君にも……言えることじゃない？君も……そんなにいるようには……思えないけど」

あれ！？

僕はお返しとばかりに挑発し返した。あの方も言っていた……相手のペースに呑み込まれるなって

ペースを崩されたりしたらいくら格下や格上の相手と戦っても苦戦をしいられてくるは必須……ここは冷静……冷静に……

「プレミアムにその言葉後悔させてあげるんだから！！……しかしそれにしても……プレミアムになんで観客が一人もいないのよおお



そんな中、ウン子だけは違って見ていた。これは僕の見解であり、必ずしもウン子がそう見ていたかは、定かではないが、あの目絶対何かするつもりだ！！長年、友達として付き合っている、勘が僕にそう告げている。

「しつもん！しつもん！」

ほら！！来たウン子何を言い出すんだろ？

「何か武道などやってるのかしら？」

「フェンシングを小さい頃からずっと」

「よっしゃ！梅せんせー！！一つ提案があるんですけどー」

ほら！！来た！ウン子何言い出すんだろ？

「なんだ！川神言ってみろ！！」

「転入生を”歓迎”してあげたいと思います」

ウン子の”歓迎”という言葉にクラスの中が一層ざわめき出した。

「ふふっ血気盛んだな川神。だがそれは面白い」

「クリスそのポニーテールがお前の腕前を見たいそうだ！」

「！！！」

そこでクリスも“歓迎”意味を悟る。

「なるほど、新入りの歓迎、か」

「そうよ！！クリスマス私と勝負よ！！」

という出来事が起きたのである。

例えば、メジャーリーグの観戦チケットとそこらの草野球のチケットがあるでしょう。見に行くとするれば、皆、前者のほうになるわけでクリスとワンス子の仕合いに……クラス……いや……ほぼ学園全体がグラウンドに集まり仕合いを見に行っただのである。

そうなるとすれば、おのずと答えは出てくる僕と武蔵の仕合いと時間が被つてあるのが原因で、ここ体育館には、一人も観客がいない状態なのである

……正確には一人だけ体育館の隅っこほうで刀みたいなの……絶対刀を持った女性が目をキョロキョロしながらこつちを見ている。まるでスパーに出かけて親と逸れてしまった子供のような感じだった。

「どこどこなのでしょうか？松風」

「いや……オラに聞いてもわかんねえぜ……ていうか……まゆっち……入学してからかなり月日が流れてるけど、未だに迷子なんてなっていないよな」

「そ、そんなことはないじゃないですか！！松風！私は純粹に仕合いが行われると聞きここに来たので、決して迷子になったわけじゃ……ありません！！」

「おい……なんだよ……さっきの間は……それにさっきオラに場所聞かな

かった？」

「え！なんのことでしょうか？…トホホ」

はつきり言ってみるからに変なストラップと会話している。今、対峙している。武蔵小杉よりある意味恐ろしい、武蔵の方はそれを感じたみたいで、一瞬変な顔になるが…あの少女の存在をいらないことにして僕の方を見ている。

「仕合いの時間ダ、両者準備はいいかな？」

話している間に、仕合い時間が来てしまっていたようだ。

僕は、ルイーさんの合図と同時に腰を低く落とし右腕を前に左腕をちょうど自分の胸のあたりにくるようにし構える。これが崩月流のスタイル、まああの方の構えと比べれば、まったく言うほどに違ったりする。

あの方は僕みたいにこんなに硬く構えたりしないでどんな状況にだって自然体、それでいてモモ先輩級に強い、あの人も武神と言われなくても問題ない領域に達している。怒ると恐ろしく怖い。

武蔵も僕の構えを見てそれに見習う、仕合いが始まるのを今かと待っている状態だ。

「両者準備ができたようだネ、今から仕合い始めるヨ！！」

西方！！師岡卓也！！」

「……はい！」

「東方！！武蔵小杉！！」

「はい！！！！」

「いざ尋常に始め！！！！」

こうして僕と小杉の仕合いが始まった…僕の心は不安と緊張の間で揺らぎ押しつぶされていた……

## 対決 直前（後書き）

おい！モロいくらなんでも鬱すぎるだろ！！と思った方……

返す言葉もないです……書いていったら、どんどんネガティブ思考になってしまった……

つ・ぎ！！こそ戦闘書くぞ！！！

## 対決！？改正版（前書き）

皆さん、お久しぶりです……って覚えてませんよね  
正直なところ、ブランクに落ちてました……orz

いざ、修正しようと思合を入れて書くことすると……どっし書けば？  
ってなってしまうずっと悩んでいました。

自分なりには書けたと思います、よければ見てください…

## 対決！？改訂版

先制攻撃を仕掛けたのは武蔵の方だった  
地面を力のある限り踏み出し一気に距離を詰め、左足に体重を乗せ  
そのまま勢いのストレート狙いは僕の顔面

すかさず対応に移る。はつきり言ってモモ先輩の動きを捉えること  
ができる僕には武蔵のストレートは凄く遅くてスローモーションに  
見える

そう思っている間に、僕は左頬を打ち抜かれていた後であった。

スタントマン並の見事な吹っ飛びを見せ、自分がいた場所から3〜  
4メートルの位置まで飛ばされる

捌く直前、体の下半身が石化しているみたいに地面と固定されてい  
る感じでまるで僕の体ではないように動かなくなってそして思考が  
一瞬止まってしまふ。

捌けるはずの安易に攻撃に当たってしまったこと、なぜ、あの時  
体が固まってしまったこと僕に考えている暇はなかった。

「はあああああああ！！」

咆哮を挙げながらいつの間にか武蔵が再び距離を詰めていて  
その場所だけ無重力になっているような跳躍を見せ滞空時間が凄く  
長い

「はあ！！」

そのまま空中で弧を描いた飛び蹴りが僕の首筋に炸裂し体は二回、三回し体育館の床と熱いキスを交わす。

まるで腕や体に見えない重りが付いていて筋肉が委縮しているのが感じ取れる

なんだろう、この感覚、今までの緊張感とはまるで違うまるで心が”ギュー”ってなってるなり、ここに居場所がないような不安感は

まさか

僕は、武蔵に対して女性恐怖症を発症しているのか？

そんな馬鹿な挑戦を受けたときだって僕…いやあの時は、小笠原さんに言われた直後だからわからなかったのか！？……自分のことの心も把握できてなかったなんて何をやってるんだ僕は！！

今置かれている状況すら把握できなかった。武蔵の言葉を聞くまでは…

「立ちなさい！師岡卓也！まだ終わってないわよ！」

はっ！僕は倒されていたのか今この状況に気づく

腕や足に力を入れ立ちあがる。体が鉛のように重たい崩月流は体が頑丈じゃないと始まらないある程度攻撃を受けても壊れたりなんか絶対にしない。

要は体や体力だけがタフなのだ。

でもどうしよう……これじゃあ勝てない……

状況が全然、変わらないというより絶望的、体が思うように動かない以上、攻めることも、守ることも出来ない……

そんなことを考えてる間、武蔵が周りを詰めて近づいている。

「まだまだ！！終わらないんだから！」

武蔵の右足がまるで加速装置でもついているように僕の横腹を狙う。

だがそこは余りにも露骨すぎた

僕だって馬鹿じゃない、狙ってくるどころくらい予測だって立てられる。だてに8年間武道していたわけじゃないんだ

武蔵が狙っている箇所を両腕でガードし衝撃に備える

だが僕の考えはすぐさま裏切られてた。

突然、トンカチで思いつきり殴られたような衝撃が頭部走る

小杉の右足はまるで蛇のように横をすり抜け、上段蹴りに変わって  
いた。

中段蹴りは言わばフェイント

本命は上段蹴りでありその体重の乗った蹴りが僕の頭を打ち抜いた。  
頭をやられて脳震盪が起きる。

さすがに今のはやられた、フェイントのタイミングもうまい

僕のガードの動作に入った瞬間に軌道を変えられ上段蹴りにシフト  
されていた。

なんとか気合いでその場を踏みとどまる。

痛いけどあの方の上段蹴りに比べれば全然…へい…き

もう二度と同じ技は喰らってはならない…そんなことあの方は言っ  
てた気がする

ここグラウンドには、大勢の人が集まっていた、まるで、周りはお祭り騒ぎ、  
弁当や飲み物を売っている奴だっている。

必死に販売している奴を見ながら、大和は考えをめぐらす。

「（そういえば、モロはどこに行った……？）」

HRからモロの姿が見えない。周りを見渡しても

京の顔、京の顔、京の顔……

「ちょっと京さん、俺の視界に入らないで頂けます？視界の90%  
があなたの顔なんですが……」

「全然いいよ？私を見て大和！！」

「人の話を聞いてくれ」

無理やり京の顔を引き剥がし周りを再度見渡す、どこにもいない  
いつも一緒にいるガクトのそばにもいないし

スグルやヨンパチの近くにもいない様だ。

「京、モロのどこに行ったか知ってるか？」

「大和は、そんなにモロが気になるわけ？少し嫉妬しちゃうよ。モロならガクトのとな……り……？　　いないね」

すかさず大和は、携帯を取り出しじりだす、指を見てみると、ものすごく速いまるで、渋谷のギャル並の熟年されたタイピング力だ。

「（モロのやつ最近おかしかったしな）」

「……おお……」

周りは歓喜を挙げている

大和が携帯と葛藤している間にクリスとワン子の仕合いが始まったようだ。

最初に主導権を握ったのはワン子の方だった。

ワン子の獲物「薙刀」

リーチが非常に長く、平安時代に多く普及した品物、一対一の対人戦に非常に強く

薙刀よりリーチが短いものならず、落とすのは困難

この戦いでも、その特徴が効いているか、ワン子の鋭い薙刀がクリスを襲う。

「間合いには入らせないわ!!!」

ワン子が一方的に斬撃を繰り出している  
あまりの速さに観客のほとんどは見えていない

だがクリスだけは違ったようだ。ワン子の斬撃を受けては流し、軽くステップし避け、動きを最小限に留め、ワン子の動きを見切っている様子

クリスの戦闘スタイル「フェンシング」

基本、攻撃手段は「突き」や「斬る」

攻撃しながら相手の攻撃を捌く技術に優れていて  
薙刀、同様小回りが利く

「おーと、やってるな」

途中から入ってきた百代が大和の肩に手を回してきてまるでサーベルタイガーがシマウマを襲ってるようにも見えなくもない  
だがその積極的な行動にドキッとさせられる大和である。

「姉さん……解説お願い……」

「ワン子は攻めが単調すぎるあれじゃあ相手に捉えられるのも時間の問題、

それにしてもあの金髪かわいいな〜家に持って帰ってなでなでしたい もうすぐ仕掛けてくるぞ」

百代の言った通りワン子の斬撃になれたのかクリスが攻勢にでる

「はあ！！」

一閃

クリスの鋭い突きがワン子の右肩に襲いかかる。

「ひゃふ！！！」

ワン子も本能で察知したのか、瞬時に合間に入ったクリスの突きを無理やり身体を右方に倒し寸前で避ける。

その時、態勢を崩され、あまりにも情けない声を上げるワン子、それを見て好機ばかりにクリスは一気にたたみ掛ける。だが、しかしワン子の獲物がそれを許さない、ワン子はすかさず後方に下がり態勢を整え、薙刀を短く持ち、クリスの攻撃に備えていた。その間0.1秒、他者からすればもう予想されていたかのようにも思えるレベル、だが違う、ワン子はクリスの行動を本能的に察知、即時対応させクリスの突きをすべて捌き切った。さすがは努力の賜物、薙刀という性質にも助けられている面もあるが、何一つ主導権を握らせない戦い方、自分が戦いやすい合間を作るセンス、戦いとしてかなり目を見張るものがある

「ワン子もなかなかやるようになったじゃないか〜」

百代の称賛が大和の耳にする、ワン子だって日々成長している、尋常じゃないスピードで幼少期の頃はあんなにも弱虫だったのに今と

なつては立派な川神院の武芸者だ

「それにしても、アンタ強いわね、ケガさせちゃいけないと思って本気出さなかつたけど、これじゃあ私が押されちゃうわ」

ワンスはおもぐるに腕や足についているリストバンドを外し地面に捨てる

すると、地面に落したリストバンドから金属のような音がし、グラウンドの砂が宙に舞っている。

「おい今まであんな重たい物をつけて戦ってたのかよ！」

「今のが本気じゃあないのか!？」

「もつと激しい戦いになりそうだぜ」

観客から驚愕をする声があちらから聞こえる

次から本気で行くわ

その言葉に対しクリスは少し眉をしかめ、明らかに不機嫌態度

「今まで手を抜いていたのか？次からは正々堂々本気なんだな？」

「ええ、そうよ!! 覚悟しなさい!! あまりにも速すぎて避けられないかもしれなわよ！」

ワン子はクリスに向かって走り出した。その瞬間爆発したかのよう  
にグラウンドの土が宙を舞うその速さは先ほどの重石をつけた時の  
3倍ぐらいスピードである。まさに赤い彗星

クリスはワン子の速さに驚嘆しそして警戒を強めるが……

しまった！

いつの間にかワン子はクリスの合間に入ってきたのである。

普通のクリスなら反応出来ない訳がなかった。重りを無くしたワン  
子は通常より速いことは、わかっていたし、それなりに仕掛けてく  
ると警戒もしていた。だがそんな予想も役に立たなくなってしまう。

ワン子は、クリスの合間のちょうど境目、ギリギリのところ、ま  
た、加速したのである

これがスピードの限界だと決めつけ思いこんだのがクリス敗因

「はあああああ！……！」

ワン子の空気をきり裂き、思い切り振りぬいた薙刀が、クリスに重  
い一撃が腹部に入る、その際、クリスの腹部から嫌な音が響き渡る。  
「くっ！……！」

クリスは思った。自分は相手を甘く見すぎていたと相手の技量を正  
確に測れなく、心の奥底で甘えがあったのかもしれない。

「やっと当たったわ〜」

ニヤリとしてやったりと少し、自慢げな表情をしている。ワン子が  
そこにいた。

だが、クリスはまだ諦めてはいなかった。  
たった一発当たったところで、諦めるクリステイアーネ・フードリ  
ヒではない

だが、今の状況で言えば、明らかにこちら側が不利、もつと分析し  
相手の技を再度見極める必要がある。

「（次は、当たらない先ほどの攻撃とスピードは見切った。相手は  
表情からして慢心しているならその隙に渾身の一撃で仕留める！）」

一方、観客の方では、先ほど、ワン子は重石を外し、クリスに一発  
攻撃を加えたところ

観客の熱は最高潮に達し歓喜の声が学園外にまで響きわたる。

なぜだが知らないが百代がイラつきながらつぶやきだした。さきほ  
ど武道をやってそんな相手のワン子の悪口を耳にしたのが原因

「さっきの攻撃ただ単に、横に振り回しただけじゃなくね？」

「まあしゃーないんじゃないか？相手はドイツのお嬢様だし、手加  
減しないと」

「おい！大和！お前もあいつ等が言った通り、ワン子は普通に振り  
回したと思うか？」

その言葉に大和は分析する。

「ごめん、姉さん素人目で見ても普通に振ってるとしか見えないよ」

「……そうか、素人からしたらあれは普通の攻撃に見え軽い攻撃に見えるけどな、それはクリスとワン子が凄いからだよ」

大和は、百代の解説に黙って聞き、今行われている、クリスとワンの戦いを見ていた。

「普段槍や薙刀などのリーチがあるものは体の主軸がちゃんとまっすぐになっておかないと先ほどの攻撃はできない。少しでもずれていたりするとそれは、攻撃が軽くなるからだ。」

ワン子は、器用にクリスの合間に入り、見事に攻撃を行ったが、普通の奴なら、あんなスピードで体の芯をまっすぐなんてそうそう出来やしない、多少ずれが生じるだろう、まあクリスも当たった直前、受け身を取っていたから辛うじてダメージは半減されたと思うが」

大和は感嘆する、これが川神院総代候補となる人の観察眼である。強さには無敵を誇る川神百代だが一部始終を少し見ただけで相手の性格や戦法、動きを一瞬で見破るセンスこれはもう神業クラスと言っても過言ではなかった。

不意に大和のポケットから機械的な音が鳴り響いた。それは大和が先ほど携帯でいじっていた時の行動で誰かに連絡をしていたみたいだ。

「うん……わかった……ありがとう……お礼はまた後日……」

「なあ、弟さっきの電話誰からだ？お姉さんに話してみな」

そう言つて百代は大和の頭を無理やり抱き抱えむしゃくしゃする。兄弟関係で思春期でもある大和にとって姉である百代の行き過ぎた行為に困りものだ。そんな姉を手であしらいながら大和は、真剣な面持ちで百代たちに伝える

「姉さん、京、ワンスの試合が終わったらガクトとワンスとあそこで荒稼ぎしているキャップを呼んで来てくれ話したいことがあるから」

これで何回目だろう？

何度床にくたばっているんだろう？

体のあちこちが痛いし口の中もどこか切れたみたいで鉄の味でいっぱいになっている。

なんでこんなに痛い思いしてまで僕はがんばってるんだろう？

もうやだな、こんなことしたって意味がない、そもそもなんで僕がこんな目にあってるんだろう……

あきらめようかな

どうせ、誰も見ていない仕合いだ、負けたって誰も知るわけがない  
僕は風間ファミリーの常識人に戻るだけだし、武蔵も僕に勝って満  
足だろう

このまま気絶した振りでもして先生の終わりの合図を待とう

僕は、文字通り倒れたままずと気絶の振りをする

すると武蔵から思いがけない言葉を発する耳にする。

「気絶した振りするな！アンタ崩月流習ってるんでしょ！！それを  
私に見せてみなさいよ！じゃないとあの人に証明できないじゃない  
……」

僕は、心の中で焦りと動揺でますますその場から動けなかった。

なんで知ってるの？

その言葉が頭の中をよぎった。他人、武蔵に僕が崩月流を習ってい  
ることも言っていないし、風間ファミリーのみんなにも言っていな  
い疑問だけが僕の全身を駆け巡る

武蔵は壁が決壊したかのようにしゃべりだした

「なんで知ってるかって、教えてあげるわよ、私、あの辺に崩月の  
家の近くで住んでいるのよ」

僕は驚きながらも武蔵が事細かくしゃべるのを黙って聴き耳を立てた。

「小さい頃、私はあの家に忍び込んだの、最初はただ単に強くなりたくて色々模索していた時、あの家が凄い武道家が住んでるって聞いていたから興味本位でね」

そして少しづつわかっていくなぜ武蔵はこんなにも弱い僕に仕合いを申し込んだのか

「そしてあの人に出会ってしまった、あの人は忍び込んだ私を怒りもせずに温かく迎え入れてくれた。そして見てしまったの、あの人の演武を私あの人みたいに強くなりたいてあってあの人と同じ流派を習いたい！って思って弟子にしてくれって頼んだわ」

武蔵は頬を赤く染めていてその表情の割にはとても真剣な面持ちだった。

「でも、無理だった……あの人は辞めた方がいいと言ったわ、なんでも体に大きな負担がかかるし危険だからって……」

あの人はやさしいからなら僕はこの人の顔を思い浮かべる  
僕が想像したあの人は、微笑んでいてそしてなぜか少しさみしそう  
で顔をしていた。

「私の周りも反対したの、崩月家は殺し屋の家系だから犯罪者の家に武道を習うのはやめておくと、私はあきらめようとしたけど、ある日、抑えきれないで起きたの」

そうか…僕か…

武蔵の戦う理由がわかった気がする。僕があの時、紅香さんに頼んで簡単に崩月流を習うことができたけど、武蔵があんなに必死になつて頼んでも習うことができなかつたし弟子にすらなることはなかつた。急に僕があの人の子になつてそれを見た武蔵は当然、こう思っているはずだ

なんで、アイツだけって…

「そう、あんたよ！ 師岡卓也あんたがあの人の子になれるなんて思いよらなかつた

だから私は証明する！ あの人の子である、あんたを倒して私が弟子になつて崩月流を習つて強くなる！ だからかかつてきなさい 師岡卓也！

武蔵は怒りや嫉妬が原因なのか拳を震わせながらこっちに近づいてくる

もう…だめだな…まるで思いが違いすぎる

そもそも、僕はこの仕合いにこれほどの思いは詰まってる

ただ、相手に武道をバカにされたみたいで熱くなってしまつて僕は負けたくないという思いでしかない、所詮、武蔵の嫉妬や怒りに比べたらゴミようだ

もういいや…このまま武蔵が気の済むまで殴られ続けよう

「おい！ そんなお前よりもやしみたいな奴に負けてどうするんだ  
モロ！！」

なんだろうよく耳にする声だ、とても図太くて下品な声

僕は声のした方向見るとそこには

ガクト、キャップ、大和、モモ先輩、ワン子、京

風間ファミリーの面々が揃っていた…

ワン子は金髪の転校生と仕合いをしてケガをしたのか京に肩を貸してもらいながら松葉杖を付いている。

「おい情けないぞ！ モロロ、そんな相手に負けるなんてお前の力はそんなものではないだろう」

モモ先輩……

周りを見渡すとさつきまで一人しかいなかった観客が今では、体育館からあふれ出すほどにいる。よく見てみるとその中には  
着物を着ていかにも優雅で上品な雰囲気を持っている、不死川心や

額にキズのある九鬼英雄、イケメンで頭いい葵冬馬、ハゲのこと井上準もいたりする……どうやら2・Sのクラスほぼ全員いるようだ。

やっぱり負けたくない！　みんなが…京が見てる前でこんなみじめなところ見せたくない！

僕は気力だけで両手に力を入れ体を無理起こし立ちあがる

「ちょうど、私たちにふさわしい仕合いになっていきたようね、でもまだ肝心の人は来ていないけど、まあいいわ潰してあげる！」

武蔵は僕に向かって走って来ている、また、左足に体重を乗せ右腕を動かさきつちり動かし振りかざしてきている右ストレートだ、狙いはもちろん僕の顔面、そんなに僕の顔が気に入らないだろうかって思うぐらいに武蔵は僕の顔面や後頭部付近を狙ってきている、多分、崩月の性能を十分理解しての攻撃だと思う、体を頑丈に出来ている崩月流にとっては、いくら体に攻撃しようがダメージはわずか、逆に武蔵の体力の方が消耗して果てるのが先だろう、それを見込んでの急所狙いの攻撃

武蔵の動作が一つ一つコマ送りされたように見えている

心臓の音が聞こえる、

音がなるたびに一步、また一步と武蔵が近づいているのを体全体で理

解する。

こんな奴に負けたくない

僕は負けたくない、こんなところで惨めに終わりたくない

何よりみんなが見ている僕の勝つことを信じてくれている人たちがいる

こんなところで終わっていいのか!?

師岡卓也!!

こんなところで惨めにやられてみんなに顔向けできるのか!?

師岡卓也!!

僕が守るんだろ!?! 大好きな人を……こんなところでウジウジうずくまってるわけにはいかないんだああああああ!?!?!!

光灯る街に背を向け、我が歩むは果て無き荒野……

奇跡も無く標も無く、ただ夜が広がるのみ……

揺るぎない意思を糧として闇のたびを進んでいく……

## 対決！？改訂版（後書き）

悩んで、悩んで、書いた結果こんな感じになりました。

なんとも言えない……orz

えーっとこの場をお借りしてアドバイス、参考、などして下さった方へ

ありがとうございます

おかげでなんとか書けました。まだ、物足りないところは修正していきます

また、アドバイスして頂けると嬉しい限りです、

そして読者の方

こんなにお待たせしてすみません：待っていない人がほとんどだろうと思いますが、今後、なるべく速く更新できるようにしていきますと思います> ( \_ \_ ) <

ご感想、誤字脱字、心からお待ちしています。

〈番外編〉銀子とワン子〈犬を探す（前書き）〉

この番外編は紅kure-naiの主人公、紅真九郎です。

モロじゃないです……はい……すみません……

今後、出す予定の村上銀子そして川神一子がメインとなる話に仕上げております。

後、ほんの少し「紅kure-nai」の作品を知っておかなければわからないかもしれないです。一応どなたでも読みやすくしてると思っています。

番外編興味無いわ〜っと思いの方はそのままスルーしてくださいませ。お願いします。

く番外編く銀子とワン子く犬を探す

早朝、星領学園の廊下にパソコンのタツチ音が響きわたる。

紅真九郎は、祝日にも関わらず学校に来ているのであるが彼女のいる部室に移動する。なんでも何やら報告があるらしい多分真九郎の予想では十中八九いい報告ではないだろう、いつものように彼女のために菓子パンを買い、怒らせるのも後が怖いので早歩きになりながら彼女の部室に急ぐ。

扉の目の前まで来て真九郎は深呼吸し、まるで戦に出る兵士のように気合いを入れ2回ノックをする。

「真九郎入ってきて」

真九郎はいつも不思議に思う、普段一般生徒も利用する部室先生や他の生徒なのかもしれないのになぜか真九郎だと彼女はわかるのか。

「何か癖でもあるのかな?…」

疑問に思いながらも真九郎は扉を開けるとまず、目に入ってきたのはパソコンと彼女の後ろ姿である、部室の中は殺風景と言っているほど何もなく周りには机に椅子彼女のパソコンの隣の机に花瓶があるだけ、中に入ると埃の匂いが鼻につき彼女はこんな状態で大丈夫なのだろうかと心配してしまう真九郎であった。

「話って何銀子」

そう今、真九郎の目の前にいる彼女こそが村上銀子である。

きつく抱きしめたらすぐに壊れてしまいそうな稀釈な体に髪は肩まであるショートヘア相変わらず度のきついメガネをかけている、だがそれに反してなのか彼女の表情はいつも険しい、とても怒っている表情に見えるのだが実は違う、彼女は極度の近眼であるため誰が相手でもこういう眼つきになるのである。

「あなた、今日何で呼び出されたかわかってる？」

「え！ えっーとなんだったかなー？」

銀子は、あきれたような顔をして真九郎の前に手を差し出した。

「はい、ちようだい」

「え！？」

真九郎は考えた、ものすごく考えた、もしこの時点で間違えた答えを出したら銀子の雷が落ちるだろう、今起こりえるすべての現象を考え導き出した結果は…

「はい、これ」

真九郎は銀子のために買っておいた菓子パンを渡した。恐る恐る銀子の表情を盗み見たが

明らかに怒っていた、さっきまで不機嫌な顔をしていたがもつと表情が険しくなり、瞳の奥を見るとメラメラと赤い炎が見える気がする

「あなた！！ バカにしているの！ 菓子パンもほしかつたけど、今月の情報代まだもらっていないんだけど！」

すごい剣幕でまくしたてた銀子は、あの川神市にいらると言われている

武人、川神百代より怖かった。会ったことがないが

銀子は代々からの情報屋をやっており伝説の情報屋、村上銀次の孫に当たるのが銀子である、おじいちゃん独自の情報網を駆使して新米の揉め事処理屋、紅真九朗に依頼や情報を提供しているのである

「ちょ…ちょっとまって！ 銀子そついえば、今月の払っていないかった…今払うよ」

真九朗は財布を取り出し中身を確認するが重大なことに気づく

「（今月ピンチだったあぁっあぁ！！ そついえば、家賃とか環さんのお酒代や食費代でしかもさっき買った菓子パンでちょうどなくなった……）」

「あの…さ…銀子」

「まさか払えないと言っくんじゃないでしょうね」

「あの…その…さっき買った菓子パンでお金…全部使ってしまったんだ…」

「………」

「銀子…さん？」

「こ…こ…ば…」

「え？ なんて？」

「この馬鹿……！」

早朝の学校で謎の女の大きな怒りの声があると云う怖い噂が流れたのは他でもない銀子の声だった。

「ほんとごめん！ 銀子必ず来月には返すから！」

「無理」

「頼むお願いだ、後一カ月待ってくれ」

「駄目」

今、真九朗が置かれている状況はあまり芳しくなかった、両手を腰に当てて仁王立ちしている銀子に対して真九朗は部室のかたい床下に正座である、正座には慣れていているけれどもさすがに床下はきつい

「だいたい、あんた一人暮らししてもうどれくらいたってるのよ！ 適応力無さ過ぎ、どうせあんたのことだから、環さんにお酒代払ったり、紫ちゃんと遊びに行ったりして無くなっただと思っけど」

銀子の予想すべて当たっている、常日ごろから一緒に行動しているわけでもないのにお金の出所まで把握されているノックのこともそうだが、いくらなんでもわかりすぎなんじゃあないかと思わざるおえない

「なあ銀子」

「何よ、言いたいことがあるんならさっさと言えば？」

「そんな言い方しなくても……なんでノックする時や俺のお金の出所がわかるんだ？ 一緒に住んでいるわけではないのに」

銀子は何を思っただのか顔が少し赤くなって何かに決心したように右手で自分の左腕を掴み  
ちよつと自分で抱きしめる状態になり真九朗の目をそらしながらこついつたのである。

「……愛の力かな……」

「ふえ！！？」

あまりにも突然なことではびくりしすぎた真九朗である、いつもの銀子なら冷静に淡々と答えるところを顔がさくらんぼのように赤くなり、恥ずかしいのか目をそらし、本人は気付いていないのかメガネが少しずれている、全然らしくない発言の疑問よりもかわいいという心で一杯になってしまった。

「（やばいかわいい……）」

すると銀子は先ほど赤くなっていたのが一変、険しい表情に逆戻り、鼻を伸ばしている真九朗に額に中指と親指に力を入れデコピンをする。

「痛い！ 何するんだよ銀子」

「バーカ冗談よ、あんたお人よしで単純だからこうやって環さんに言い寄られてほいほいおごってたんでしょ、それにこんな朝早くノックしてくる人なんてあんたぐらいしかいないし、支払いは今日締め切りだからね、引き延ばしたりとか当然なし」

「だったら、俺に仕事をくれないか？ 今週仕事がなくて困ってるんだ頼む！ 銀子」

まるで浮気がばれた夫のように真九朗は泣きついた。あきらめたように銀子は、ノートパソコンのキーボードを使い、指を走らせる

「わかったわ、今、ちょうど入ってきた依頼があるから」

「ありがとう、銀子！ 助かったよ」

早朝、ここ川神市では、世界有数の総本山、川神院がありそこでは優秀な武道家たちが修行に勤しんでいる、そしてその中でも、より一層修行に真剣な者がいた

「学校お休みだし修行がんばるわよ」とりあえず、隣の県まで走るわ」

今日も元気オーラ全開のポニーテール少女、川神一子である

一子は腕や足を重点的に動かしてストレッチをし、そして

「今日はタイヤ三つつけて全速力で走ってみせるわ！ めざせ！  
ベストタイム！」

一子の一日は長い

「なあ銀子、依頼内容を教えてくれ」

銀子は無言のまま、写真を一枚取り出し真九朗に見せた

「これ、名前はケンタロウちゃん2歳オスよ」

「なんだよこのバカい……個性的のある犬は！」

銀子を取りだした写真には一匹の犬が写っていた。まるでこつちをバカにしているような面構えで左目には墨みたいに丸字で黒くなっているとても特徴のあるバカ犬であった。

「なんでも、飼い主さんから逃げ出してこの町をブラついているらしいの、であんたがそれを捕まえる、わかった？」

「えっーと……それだけ？」

「そう、それだけ」

銀子はノートパソコンを閉じ鞆にしまうと椅子に掛けてあった上着を着て外にでる支度をする

「え？ 銀子も来るの？」

真九朗の返答に対して銀子は頬笑みながら答えた。

「ええ、今回の依頼主には、私に知り合いでお店の常連なのよ、それに一人で見つけるより二人で見つけた方が早いでしょ？」

駅前に着くと真九朗と銀子は探し回った、最初は、公園、その後商店街や、ペットショップで聞き込みをして回った。さすがというべきか、これだけ探しても情報の一つも入ってこないまさに幻のバカ犬である

「いないな……銀子……」

「ええ、これだけ探しまわっても見つからないとなると不思議ではないわ」

銀子は公園のブランコに乗りながら、考えている様子、真九朗も一

緒に考え模索していく

真九朗は思い出したように銀子に案をだした。

「案外、食べ物とかで釣られるかもしれない」

「はあ、あなた、最近の犬はかしこいのよ、そんな単純に引つ掛ければ、そもそも依頼なんてこないわよ」

「やってみなきゃわからないじゃないか銀子、残ってる菓子パンくれないか？ちよつとやってみる」

そう言つて真九朗は銀子から貰つた菓子パンを像の形を模様した滑り台の下に置く

「あなた、やつてて恥ずかしくない？ そんなので来るはずが……」  
ありえないことが起きた、一匹の犬が菓子パンに向かつて歩いて来ている、あのバカ犬だ、その後ろから、ポニーテールをした少女とタイヤが一緒について来ていた。

「こら！ そんなの食べたらお腹壊すわよ」

そのポニーテール少女は菓子パンを食べそうになっている犬の体を引きずり離そうとしている。犬はその菓子パンをたいあげ、甘い匂いを嗅ぎつけたのか急に方向転換し、真九朗のいるところまっしぐらしていく

「げっ！ こつち来た！！」

真九朗はびっくりしたように声をあげ、バカ犬はそのまま真九朗をスルーし、ブランコに座っている銀子に向かって突撃してきた。

「きゃー!……」

銀子は、普段出さない声をあげ、犬のもみくちやにされていくその際に服がずれて白い下着がチラほら見えている。こうやってみると何気にエロい……

「ちょっと…何を…して…るのよ」

「ワン! ワン!」

どうやら、このバカ犬は、銀子が菓子パンを持っていることを気付き嗅ぎまわっているらしい銀子は手を押さえて必死に抵抗している

「こら…ちょっとやめて…あんたも見てないで手伝いなさいよ!」

「わ、わかった。銀子に離れる! このバカ犬」

真九朗は銀子のバックに入っていた菓子パンを遠くへ投げつけた。するとバカ犬は菓子パン目掛けて追いかけている、だが追いかけているのは犬だけではなくたポニーテール少女が先周りにいた、両足に力を入れバネのようにしてそのまま跳躍、空中に浮いている菓子パンをキャッチしたのである。

真九朗と銀子は終始啞然、バカ犬は悔しそうにしその公園から逃げだしていった。

「だめじゃない! 食べものを粗末にするなんてお天道様が許しても私が許さないわ!」

ポニーテール少女は銀子と真九郎に指をさし、何か誇らしげである。

「あ、あ、ありがとう」

銀子はポニーテール少女に対して礼を言う、するとうれしかったのか犬耳としっぽのようなものを生やしているしっぽを見てみると高速に振っている本当に犬のようだった。

「今度から投げないようにしなさいよ！ 取るの大変だったんだから」

悪態ついているポニーテール少女は持っていた菓子パンを銀子に渡すと突然どこからともなく”グ”””という音が鳴り出した、もちろん銀子ではないし真九郎でもなかった。

銀子はおもぐる菓子パンが入っている袋を左右に動かすとポニーテール少女は操られたかのようにその袋をキラキラした目で見て左右に揺れている。

「（なんだか可愛い…）」

銀子は無意識に右手が伸びてポニーテール少女の頭を撫でる

「いいこいいこ」

「わーいもつとほめてほめて〜って違うわよ！」

その後、ポニーテール少女に菓子パンをあげると勢いよく食べたした。

見ているこつちもおいしそうに思えるぐらいの食いつぶりである。

「まぐまぐ…まぐまぐ」

「あのお名前いいかしら？」

「川神学園2 F川神一子よ！！ パンおいしかったわ〜ありがとう」

「ええ、私は、星領学園2年の村上銀子そしてその隣にいるバカは紅真九朗あなた川神学園の生徒なんだ!？」

「知ってるのか？ 銀子？」

真九朗は銀子の嫌味を無視した、そもそも口喧嘩で勝てるわけでもないし反撃したら倍にして返されるのがオチだからである。

「知ってるも何も有名じゃないあそこの学校、川神学園は文武両道に長けていて

決闘システムとか独自の教育方針をしている学校よ。でもその生徒がなんでこんなところにいるのか謎だわ。確か川神ってもっと数県向こうなはずよね？」

「うん！ 今までランニングしてここまで来たの、今から川神に帰ろうかなと思ってたんだけど、公園の方で甘い匂いがするってパトラ シュが言ったのよ！」

「パトラ ユ？ それってさっきの犬の名前？」

「うん、そう言ってたわよ〜」

「そう言っていた？誰かが言ったの？」

「うん、あの犬が言ってたわ〜ワンワンって」

銀子はこの一子の言っている意味がわからなかった。一子はまるでさっきのバカ犬としゃべっていたような言い方をしているのでより一層混乱した。

しかも　トラッシュユという名前ではないし見るかぎりフラン　スのような賢い犬ではないと思う、少なくともあんなに食い意地ははっていない。

「一子さんって犬の言葉がわかるの?」  
恐る恐る聞いてみた。

「そんなのわからないわよ〜ただこう思ってるのかなって目を見るとわかるような気がするの〜!」

「そうなんだ……」  
銀子は残念な子のように一子を見つめる、一子は、まるで無垢な子供のように目をキラキラ光らせている。下半身を見て見ると、膝を曲げその状態で維持している。まるでそこに椅子があるかのように

「一子さん、さっきから言おうと思ってたんだけど、何してるの?」  
「見てわからない?　修行してるのよ!　こうやって1秒も時間を無駄にしたくないの」

「そうなの……」

銀子はつつこむのをやめた、もとからそういうポジションでもない

し、それにこれ以上つづくとなんか出てくるのかわかったもんじゃない、不意に真九朗を見ると彼もまた、顔を引きずらせている。

「（川神の学生って変人が多いって聞くけど噂は嘘ではなさそうね……）」

銀子は先ほどのバカ犬のことと今、自分らが受けている依頼を一子に話した。

なぜなら商店街や近辺の聞き込みをしても情報が非常に少なく唯一接触のある一子から有力な情報があるかも知れないと踏んだからである。

「えーっとね、いつも通り河原でランニングをしてたら途中、犬も一緒について来てきたのなんだか一緒に遊びたいって言ってたから犬と追いかけてこしてたの！ 当然私が勝ったけどね！」

「言っただって…要するにあの犬は河原付近で見かけたってことね？」

「うん！ うん！」

ワン子は疑似的に尻尾が出てきて振り振り揺れている。

「なら、河原にまたいったかもしれないわね、行ってみましょ」

「わかった、銀子」

「ありがとう、一子さんあなたのおかげで見つかりそうだわ」

銀子と真九朗は公園を出て行くことすると一子から思いがけないことを言い出した。

「だったら、私も手伝うわ!」

「え! いいの?一子さん今修行しているんじゃないの?」

「犬探しも一杯走ると思うから修行になると思うしそれにさっきの菓子パンのお礼 後、一子じゃなくてワン子でいいわ! みんなからも言われているし、私もワン子の方がじっくりくるし」

「なら、私も銀子でいいわ ワン子さん」

「あの二人さん仲良くなったのはいいんだけど…俺のこと…忘れてない?」

「え!?! そういえば、アンタいたの?」

真九朗の嘆きが公園で響き渡った。

「いたよ! ていうか最初からいたし」

「気付かなかったわ　　犬に襲われてた私を終始やらしく見ていた  
紅真九朗さん？」

「すみませんでした」

真九朗はその場で土下座した。彼女が言っているの大体合っているからである。ここは潔く謝った方が無難だ。

「まあいいわ……そんなこと……言ってくれたら見せてあげたのに……」

「え？　なんて？」

「なんでもない」

銀子は一瞬赤くなるとすぐに何事もなかったように振る舞う

その間を割って入るようにワン子も真九朗と銀子の言葉の掛け合いを見ていた。

「（この二人お互い好きなのかな？）」

真九朗と銀子とワン子は公園を後にし。徹底的に探すために二手に分かれることにした。

「私とワン子さんとで河原の方を探すからあんたは、もう一度、商店街の方を探して見つけ次第ケイタイに連絡して」

「了解」

真九郎は、商店街の方へ走って行き銀子が真九郎の後ろ姿を眺める。銀子の頬はまた赤く桜色に染まり、まるで恋でもしているかのようだ。それをワン子眺める形であった。

「ねーねー銀子」

「何？ワン子さん」

「あの真九郎っていう人好きなの？」

「ふえ！？ あ…え…つとあんな奴好きじゃないわよ！ いつもお金はないし、お人よしだし、おまけにいつも布団は臭いし、あんな奴の好きになる要因が見つからないわ！」

銀子は本心を突かれたのか一気にまくし立てる、焦っているのか目の焦点が合っていない。明らかに、真九郎に好意に思っているのが誰であつても一目瞭然である。

「そ、そうなんだ」

「（私が見てもわかりやすいわ〜ベタ惚れじゃない）」

「そ…それよりワン子さん、この広い河原でどうやってあの犬を探す？ やっぱりさつき引っ掛かっていた。何か物で釣る作戦でいった方がいいのかしら？」

「そんなことしなくても確実な方法があるわ！」

またしてもワン子はドヤ顔をする。

「その方法って何ワン子さん？」

ワン子は息を思いつきり吸い始めてそして…

「ワンワンワン！ ワンワンワン！」

この行為を見た銀子はア然とした。まさか犬の真似をしておびき出すということなのだろうか？ それにしてもワン子が犬の真似をするのについっかわいいと思ってしまう。

「ほら！ 銀子も！ 早く！」

「え！？」

「私に続いて真似して」

「え……でも私は遠慮しておくわ」

「だめよ〜それじゃあ、あの犬こないじゃない〜ちゃんと私たちが仲間だつてこと知らせておびき出さなきゃ」

「う……わ……ん」

銀子はワン子に催促され小さな声で吠えた。恥ずかしいのか肩震えてまたしても顔も赤い

「もっと大きな声で!!」

「わん！ わん！」

「（今日は厄日だわ……なんで私こんなに何回も恥ずかしいことしてるのかしら……全部アイツのせいだわ）」

「銀子……何で吠えてるんだ？」

「!?!」

「アンタ　どこから見てたの？ていうかなんでこっちにいるのよ  
商店街の方は…」

「い…いや商店街の方一通り探していなかったからこっちに来たん  
だよ。携帯で連絡もしたけど掛からなかったし　　うああ！　や  
める銀k……………」

そういえば、携帯をマナーモードにしていた気付いていなかった。  
銀子は真九朗のいるところまで近くと真九朗の後頭部を殴り続けた。  
もう恥ずかしさを通り越してパニック状態である。

「今すぐ忘れなさい　じゃないとアンタの記憶が吹き飛ばまで殴り  
続けるわ」

「わ、わかった！　忘れt's忘れたよ銀子！」

「痴話喧嘩はそのくらいにして、お二人さん、あの犬が目の前にい  
るわよ」

「痴話喧嘩じゃない！！」「」

銀子と真九朗が叫んだと同時に近くまで来ていたバカ犬もびっくり  
し逃げだす直前だった。

「逃がさないわよー！！！」

ワン子はバカ犬より先周りにして退路を塞ぐ

「ワン子さんありがとう！ アンタは右から私は左でワン子さんはそのまま正面で追い込むわよ！」

「了解（わかったわ）」

銀子に言われた通りワン子も真九朗もバカ犬を囲むようにして徐々に距離を詰めていく。

バカ犬は追い込まれていることを察知しその場でグルグル回っている。どうやらバカすぎてどうやって逃げればいいのかわからないみたいだった。

「今よ！」

銀子の号令と共にワン子と真九朗が動き出す。

そして銀子も二人の足を引っ張らないように動くが…

銀子たちがバカ犬を囲んだその時、バカ犬はその場で高く飛び跳ねて跳躍

銀子たちの囲いから逃れていたである！！

そして勢いよく駆けていく直前、真九朗の懐からパン耳を取りだしそのバカ犬が見えるように投げつけた。

バカ犬は案の定パン耳に反応し飛びついてきたのが最後であった。

「パ ラッシュュ！ 召しとったり！！」

バカ犬は見事にワン子の手で捉えられ首輪にリールをつけ自由に動かないようにする。

「はぁーやっと終わったわ、それにしてもアンタよくパン耳なんて持ってたわね」

「商店街に行っている時にさ、パン屋さんからタダでもらったんだよ」

「そうね〜アンタがお金なんて持っているわけないわよね。じゃなきゃこの依頼受けてもいないんだし」

「一言余計だよ……銀子……」

「それにしても今日はありがとうワン子さん助かったわ」

「うん、こっちも楽しかったし、また銀子に会いにここにくるわね」

「楽しみにして待っているわ、それじゃあ」

ワン子と銀子は固く握手をする。今度はもっと違う形で一緒にシヨッピングしたり街中をあるいたりして遊びたいと思う。元々自分の難儀な性格のせいで真九朗以外、友達がいらない。こつやって気軽に話せる友達ができたのは初めてであった。

「私もワン子さんに　川神に遊びに行くわ」

こつして、ワン子と銀子の長いようで短い一日が幕を閉じるのである。

〈番外編〉銀子とワン子〈犬を探す（後書き）

こんなに長く三人称で書くのは初めてで意味不明なことになっていたらすみません

後、本編期待していた方すみません

月に1話が仕上げるのが限界かもしれないです。プライベート忙しくて執筆に時間が取れないorz

ほんと申し訳ない…

後、誤字・脱字、ご感想等あればお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3933s/>

---

真剣で臆病者に恋しなさい

2011年10月10日12時08分発行